

第一編 知恵と人の行く末

神を求め、義を行なえ⁽¹⁾

知恵の書

1 地を治める者たちよ、義を愛せよ。⁽²⁾

善意をもって主を思い、

純ぼくなく心で主を求めよ。

2 主は主を試みない者に見いだされ、

主を信頼する者にあらわれる。

3 よこしまな思ひは人を神から遠ざけ、

御力はそれをためす愚か者をこらしめる。⁽³⁾

4 知恵⁽⁴⁾は悪をたくらむ靈魂にはいらず、

罪を負う身に住まない。⁽⁵⁾

人を教える聖霊⁽⁶⁾は偽りを避けて逃げ、

愚かな思ひから遠ざかり、

不義がはいってくると、ろうばいする。

【注】(1) 1-15 は次のように区分することができよう。(1) よこしまな思ひは知恵を追い払うから、正しい思ひ、
で神を求めよ(1-15節)。(2) 悪いことは全知の神からのがれることはできない(6-11節)。(3) 悪い行ないは死を
招く(12-15節)。本章最後の16節は2章への橋渡しとなっており、その上、その主題の前置きの働きをしている。

(2) 「地を治める者たちよ」という呼びかけは、著者の時代に共通した用法で、文章に権威をもたせるための
ものである(王たちに呼びかけている6-12の場合も同じ)。実際に著者が呼びかけているのは、広く一般に對し
てである(解説7ページ参照)。またここでいう「義」とは、統治者に必要な義のことではなく、すべての人に必
要な知恵のことである(注4参照)。

(3) 1節第二行から3節第二行にわたる六行(16-20、25-30)の詩形は、交錯対句法によって配列されている。すな
わち16と20、17と25はそれぞれ同義的対句であり、21(「試みない」と30(「ためす」)、22と26はそれぞれ対立的対句
である。このように、一つの考えを単に述べるのではなく、それと同じ考えを別の句でくり返したり、対立する考
えを表わしたりする詩形は、本書の各所に見られる。

(4) 本書の名称となった「知恵」という語は、だいたい一貫して詩的に擬人化され、相関的な次の二つの意味
に用いられている。(1)「知恵」は人が神から授けられる特殊な力で、これなしでは最高の真理を理解することも、
本源的な善すなわち神を求めることもできない。(2)「知恵」は神の属性の一つである。神はこれによって、すべて
のものを完全に知り、計画、創造、主宰(8-14、9-17参照)する。(第二の意味についての詳細は解説18ページ参照)。

(5) ローマ6:19-20、7:14、ヨハネ8:44参照。

(6) このギリシア語は、新約聖書に用いられている「聖霊」というギリシア語と同じであるが、三位一体の第
三のペルソナをさすものではない。ここでは、ただ、道義の中心である神から与えられる力を意味している。三位
一体の奥義はキリストによって啓示される。写本や訳本の中には、「人を教える聖霊」の代わりに「知恵の聖霊」
と読んでいるものもある。

知恵は人をいつくしむ霊であるが、

神をそしめる者のくちびるをとがめずにはいない。

神は人の腹を見抜き、

心の底まで見とおし、

舌の語るところを聞くおん者である。

主の霊は世界に満ちており、

すべてを保ち、人のいかなる声をも知っている。⁽⁸⁾

それゆえ不義を語る者は身を隠しきれず、

こらしめる義がかれを見のがさない。

悪人のたぐらみは取り調べられ、

そのことばの響きは主にとどく。

これはその罪惡のこらしめのためである。

ねたみの耳はすべてを聞き、

つぶやきの小声も隠れえない。

無益なつぶやきを言わないようにし、

舌を慎んでそしりを避けよ。

14

神は万物を存続させようとして造った。

この世に生じたものはすべて益となり、

13

神は死をつくらず、

生きものの滅びを喜ばない。

12

あやまった生活をおくって死を求めな。

手のわざによって滅びを引きよせるな。

ひそかな話も罰を免れない。

偽りを吐く口は魂を殺す。

(7) 直訳では「じん臓」。じん臓は感情や潜在意識の源であり、次句の「心」は意識的知的行為の源であるとみなされている。人の最も秘密の感情や思想でも、全知の神の目からはのがれることはできない。

(8) 「満ちており」という動詞は元丁形である。これは宇宙創造のときにすでに存在していた「神の霊」(創1²)に関連させたものかもしれない。なおエレミヤ23²⁴、詩139(138)を参照。本節は聖霊降臨の大祝日の典礼の中に用いられている。

(9) 神は、ご自分の主宰についての人のつぶやきに対して、面目を守るために熱心に聞き耳を立てる、と擬人的に表現したものである(出20³⁴、申29²⁰、詩79(78)、二コリント11²参照)。

(10) 肉体的死と霊的死のことが16節に述べられている。両者とも罪の結果である。13-14節の場合のおもな意味は肉体的死であり、16節の場合にはむしろ霊的死である。聖パウロはローマ6²³で霊的死を「罪の払う報酬」と呼んでいる。なお両方の死の原因である原罪(創2¹⁵、17、3¹⁻¹⁹)に言及している2²³⁻²⁴参照。これに反して、不滅の原因となるものは義である(15節、なお3¹⁻¹⁹参照)。

滅びの毒はそのうちにはなく、

よみのくには地上を治めない。

義は不滅である。⁽¹²⁾

悪人の人生観⁽¹³⁾

悪人は行ないとはばで死を招き、

これを友と認めて恋い慕い、

これと契りを結ぶ。

かれらはその配下となるにふさわしい。

かれらは正しく考えず、互いに言い合う、

「われわれの一生は短くていたましい。

人の最期にあたっては施すすべはなく、

またよみのくから人を救い出した者はだれもない。⁽¹⁾

われわれは偶然生まれ出た者であり、

のちには全く存在しなかった者のようになるであろう。

われわれの鼻の息は煙であり、

2

1

15

16

2

思いは心の鼓動から出る火花にすぎない。

これが消え去るとき、からだは灰となり、

魂は軽い空気のように消えうせる。

われわれの名は時とともに忘れられ、

われわれのわざを思い出す者はだれもない。

われわれの一生はうすれゆく雲のように過ぎ去り、

また日の光に追われ

その熱におしひしがれる霧のように消えうせる。

(11) 「よみのくに」は、普通は死者の住む所を意味する。しかしここでは、むしろ擬人化された死のことである。

(12) 教皇シクスト五世の手になる改訂ブルガタ訳には、このあとに「しかし不義は死を招く」という一句がつけ加えられている。この追加は本節の意味を明りようにするが、原典によるものとは思われない。

(13) 悪人は愚かにも死を愛するという前置きが16に述べられ、これに続いて21-22には、死を招くよこしまな思い、ことは、行ないが、悪人自身のことばで無遠慮にかつ詩的に描かれている。(1) 悪人は死後の生命を否定し(1-5節)、(2) 快楽にふけり(6-9節)、(3) 貧しい義人を迫害する(10-20節)。悪人がいかに誤っているかについては、21-24節に示される。

【注】(1) 本句は「よみのくから帰ってきた者はだれもない」とも訳せる。しかし本訳の意味(16にふたたび出る)のほうがもっとよいと思われる。なぜなら、本句は14の場合と同じく、死者の住む所ではなく擬人化された死の意味をもつからである。

われわれの時は影のように過ぎゆくものであり、
近づくわれわれの最期はもとにもどらない。⁽²⁾

これは印をおされたことであり、だれもそれをもどすことはできない。
さあ、現にあるよいものを楽しもう。

青年たちのようにこの世のものをむさぼり用いよう。

よい酒と香料におぼれ、

春の花を見のがさず、

ばらのつぼみをしおれぬうちに冠としよう。

われわれが飲み騒がぬ野べ^{*}はないようにしよう。⁽³⁾

どこでも楽しみの跡を残しておこう。

これがわれわれの運命であり、われわれの定めである。

貧しい義人をしいたげよう。

やもめをあわれまず、

年を重ねた老人の白髪も敬わないようにしよう。

われわれの力を正義のはかりとしよう。

弱さは無益なものとされているから。

12

義人⁽¹⁾を待ち伏せて襲おう。かれはわれわれを煩わせ、

われわれの行ないにさからい、

律法を犯したと行ってわれわれをとがめ、

教えにそむいたと行って責めるから。

かれは神を知っていると言いふらし、

主の子であると名のっている。

13

(2) 本句は「ひとたび最後が来れば、くり返しができない」(ヘブライ9:27参照)とも訳せる。いずれにせよ、死は決定的なもので、封印されて取り消しのできない勅令のようなものである(エステル3:12,8参照)。

(3) 現在のギリシア語原文には「われわれのうち、飲み騒ぎに加わらない者はないようにしよう」となっているが、これはどちらかという要領を得ない。ラテン語訳は本句を二重に訳している。すなわち「ヘーモン」(われわれのうち)というギリシア語を、「レイモン」(野べ)と読み、この読み方による訳を、節として、現在のギリシア語原文にしたがった訳を、節としてしている。あるギリシア語写本の付録「知恵の書の用語表」の中には、この「レイモン」という語が含まれている。これは2:9においてのみふさわしい語である。「レイモン」と読んで本訳のようにしたほうが、節から、節にわたる詩の意味がよくわかる。すなわち悪人どもが快樂にふけることを互いに勧め合っていることをうたったものであり、節が前置きで、節が結論である。この間に6bと7a,7bと、9と10の三組のとのつた対句が見られる。

(4) 12:20節はキリストのご苦難についての預言だと解されていた。13:16d,18,20節とマタイ27:41,44、詩22(21)とを特に比べよ。12節で「律法」に言及しているところから、発言者である悪人は、ここでは異教徒ではなくユダヤ人だということがわかる。また16節の「にせもの」は、信仰を捨てたユダヤ人をさす。

- 14 かれはわれわれの思いのとがめとなり、
見るだけでも息ぐるしい。
- 15 かれの生活は他の人とは異なり、
そのふるまいもかけ離れている。
- 16 かれはわれわれをにせものと思ひ、
汚れを避けるようにわれわれの道を避ける。
また義人の最期は幸福であると言ひ、
神は父であると誇っている。
- 17 かれのことばが真実であるかどうかをみよう。
かれの終わりに何が起こるかためしてみよう。⁽⁵⁾
- 18 もし義人が神の子ならば、神はかれを助け、
敵の手から救うであらう。
- 19 ののしりと責苦でかれを試みよう。
その柔和をたしかめ、
その忍耐をためすために。
- 20 かれに恥ずかしい死の宣告を下そう。

- 21 かれは助けが来ると言うのだから。⁽⁶⁾
かれらはこのように考える。しかしかれらは道に迷っている。
- 22 かれらの悪がかれらをめくらにしたから。
かれらは神の奥義⁽⁷⁾を知らず、
聖性の報いも望まず、
汚れのない靈魂の誉れを悟らない。
- 23 神は人を朽ちないものとして造り、
ご自身の本性^{*}にかたどって造った。⁽⁸⁾
- 24 しかし悪魔のねたみからこの世に死がはいった。
そしてその配下にある者は死を味わう。⁽⁹⁾

(5) ラテン語訳は本句を次のように二重に訳している。「かれに何が起こるかためしてみよう」「かれの終わりがどうなるかわかるのだ」。

(6) 直訳では、神の「訪れがあるであらう」。本書によく用いられる聖書の表現で、恵みを与えるため(3713 415)、もしくは罰するため(1411 1915)の神の特別干渉を意味する。

(7) 義人らに後の世でより多くの報いを与えるために、この世におけるかれらの苦しみをみてそのままにしておく、という神の摂理のこと(311 参照)。

(8) 創126-27 217 参照。

(9) 創31-19、本書112-16 参照。悪魔の誘惑によるアダムの墮落は靈的死をもたらし、それによって肉体的死

義人の報いと悪人の罰⁽¹⁾

- 3 1 しかし義人の魂は神のおん手にあり、
 2 どんな責苦もかれらに触れることはできない。
 3 かれらは愚か者の目には死んだように見え、
 4 かれらがこの世を去るのは災いだと思われ、
 5 しかしかれらは平安のうちにある。
 6 人の目には罰されたようにみえても、
 7 かれらは滅びない⁽²⁾という希望にみちている。
 8 かれらはわずかな苦しみをなめて豊かな報いを受ける⁽³⁾。
 9 神はかれらを試み、
 10 ご自分にふさわしいと認めたから。
 11 かれらは炉の中の金のようにためされ、
 12 全焼納祭⁽⁴⁾のいけにえのように受け入れられた。
 13 神の訪れ⁽⁵⁾のとき、かれらは光り輝き、

- 1 あしにつけた火花のようにとびひろがるであらう⁽⁵⁾。
 2 かれらは国々を治め、民を支配し、
 3 主は世々にかれらの王となるであらう⁽⁶⁾。

がこの世にはいった。しかしキリストがこの世をあがなった後は、すべての人が肉体的死を味わうとはいえず、罪を犯して悪魔のもとにとどまる悪人だけが霊的死を味わう(ローマ5¹²、ヨハネ8⁴⁴参照)。

【注】(1) 著者は2²¹⁻²⁴で悪人の人生観がまちがっていることを述べ、これに続いて3-5章で義人の運命と悪人の運命との比較を四つに区分して述べている(1³⁻¹²、2^{3¹³-4⁶}、3^{4⁷-19}、4^{4²⁰-5²³})。第一の部分においては、来世における義人の永遠の平安(1¹⁻³節)と、現世における悪人の罰(10-12節)との比較が見られる。第二、第三、第四の比較にもそれぞれ題目を付した。なおその注参照。

(2) すなわち「不滅」。この語が名詞としてあらわれるのは、旧約聖書ではここが初めてである。単に終わらなき生命を意味するだけでなく、完全な幸福の永遠性をも意味する。この永遠の幸福に対して義人がもっている希望は非常に強い。この希望は現世で苦しんでいる義人に慰めを与えるものである。1¹⁻³節は殉教者のための典礼によく用いられている。

(3) 本句の思想は、聖パウロの書簡(ローマ8¹⁸、二コリント4¹⁷、一コリント11³²、ヘブライ12¹¹)に明白にあらわれている。

(4) 「全焼納祭」とは、いけにえを完全に焼却して神にささげる祭儀のこと(レビ1注3参照)。

(5) 最後の審判の日に、義人は明るい炎のように輝き(ダニエル12³、マタイ13⁴³参照)、あし(墓)のようにかわいた悪人を燃やし、火花のようにひろがる(オバデヤ¹⁸節、ゼカリヤ12⁶参照)。これは義人が最後には悪人をさばいて勝利を得ることを詩的にうたったものである。次節とその注参照。

(6) 聖パウロは、義人が最後の審判にあずかることを、一コリント6²⁻³でははっきり述べている。義人が神とともに世々に君臨することは、黙22⁵に述べられている。

9 主によりたのむ者は真理を悟り、

主を信じる者は愛のうちに主とともに住むであろう。

主に選ばれた者には恵みとあわれみとがある。

10 悪人はかれらの思いにふさわしいこらしめを受ける。

かれらは正しいことをおろそかにし、主から離れたから。

11 知恵と教えを軽んじる者はあわれみである。

かれらの希望はむなしく、その労苦はみのらず、

その働きは無益である。

12 かれらの妻は愚かであり、

その子らはよこしまで、

その子孫はのろわれる。

子のない義人と子持ちの悪人⁽¹⁰⁾

13 汚れのないうまずめ、

罪の床を知らない女は幸いである。

神が魂を訪れるとき、実をむすぶであろう。

14

手をもって罪悪をはたらかず、

主に対してよこしまな考えをもたないかんがん⁽¹¹⁾は幸いである。

かれにはその忠誠のためにすぐれた恵みと、

主の宮におけるいっそう満足な地位⁽¹²⁾とが与えられるであろう。

(7) 悪人の受けるこらしめは、かれらが2:11で否定した永遠の生命を拒まれることである。
 (8) 悪人の希望は物質的幸福を見いだすことである(2:10)。しかしまことの幸福は物質にはない(マタイ16:26)。
 参照。

(9) 例外はあるが、だいたい妻子の道徳生活は夫の影響をうける(シラ41:16参照)。本節は義人と悪人の第二の比較への橋渡しとなっている。

(10) この部分と次の部分(4:7-10)において、祝福さるべき義人に関する二つの難点、すなわち子宝に恵まれない場合と若死にする場合とがそれぞれ考察されている。不妊は不名誉であり(創30:23、ルカ1:25)、子は神の恵みであるとみなされている(申7:14、詩127[126:3-5]、128[127:1-3])。しかしこの世における不妊は、これを神から与えられた試練(3:5節参照)として忍耐強くかつ操正しく甘受するならば、審判における神の訪れ(13節)のとき、大きな霊的実を結ぶであろう。13節とイザヤ54:14節とイザヤ56:3:1とを比べよ。著者はこの部分において、徳があれば子がなくても霊的に富んでいること(3:13-15、4:1-2)、および悪人の子孫のみじめな最期(3:16-19、4:3-6)を交互に考察している。

(11) この原語は去勢された男を意味する。後宮に仕える役人は去勢されたという古代慣習に由来する。(創37:36、39注2参照、なお宮人については40:2とその注1を見よ。)この場合のように広義では、子を産むことのできない不能者のこと。さらに広い意味では、霊的動機から結婚をしない人をさす(マタイ19:11参照)。

(12) すなわち天国において(詩11[10]:1参照)。本節には、子をもてないかんがん(官官)の苦しみと、天国で名誉ある地位を与えられるかんがんの喜びとが、対照的に描かれている。

(13) 子をもつことよりもっと喜ばしいこと(イザヤ56:2:1参照)。

よいわざの実は光榮にみち、

その根である賢明は朽ちることがない。⁽¹⁴⁾

かんつう者の子は榮えず、⁽¹⁵⁾

不義の床の子は消えてゆく。

長く生きながらえても、かれらはないがしろにされ、

また終わりにのぞんで、その老年は敬われぬ。

若くして死んでも、かれらにはなんの望みもなく、

さばきの日にはなんの慰めもない。

およそよこしまな者の子孫の最期はみじめである。

徳があれば、子がなくてもよい。⁽¹⁾

徳についての記憶は滅びることがない。⁽²⁾

それは神にも人にも認められる。

徳がいると、人はこれにならない、

徳がないと、人はこれを求め慕う。

徳は永遠に冠をいただいてがいせんする。

苦戦に勝って汚れない賞を得たから。

5 悪人におびただしい子孫があっても無益である。

それはにせのさし木から出たもので、根を深くおろさず、

堅い土台を造らない。

4 たとえ一時枝をしげらせても、

かれらは安定していかないから風にゆられ、

大風の方で根こぎにされる。

5 小枝は成長しおわらないうちに折られ、

(14) 賢明は、いかなる試練にあっても豊かな実りをもたらす朽ちることのない根にたとえられている。賢人の生活を神の意志に従わせる知恵のことである。

(15) この語は文字どおりの意味のほかに、ここではモーセの律法に反する結婚をしたユダヤ人、また自然法に反する結婚をした異教徒をもさす。ファラオ王室の例にならない、エジプトで一般に行なわれていた兄弟姉妹間の近親結婚の意味にとる者もある。

【注】(1) すなわち子持ちの悪人より子のない義人のほうがよいという意味。この比較は3:13-14の基礎となっている(シラ16:34参照)。本句のラテン語訳「貞潔な人々の榮えはなんと美しいことだろう」は、童貞性の輝かしさをたたえる典礼の中に用いられている。

(2) 本句は次節に発展し、その思想が補われている。すなわち「節」はどのような人が徳を認めるかを、「節」は徳が来世においてどのように神に認められるかを述べたものである。「節」は、徳を、闘技場で苦戦に勝ち榮冠をうけてがいせんする競技者にたとえている。聖パウロもキリスト信者を競技者にたとえている(一コリント9:24-27、二テモテ2:47参照)。

その実是用をなさず、食するまでに熟さず、
なんの役にもたない。

罪の眠りから生まれた子らは、

さばきのときに親の悪の証人となる。⁽³⁾

短命の義人と長寿の悪人⁽⁴⁾

義人は若死にしても、いこいを得るであろう。

ほまれある長寿はその長い年月によるものではなく、

また年の数で計られるものでもない。

賢明こそ人にとって白髪であり、

汚れない生活こそ高齢である。

かれは神によみされたので愛され、

罪びとの中に住んでいたので所を移された。⁽⁵⁾

かれが取り去られたのは、悪がかれの知力を変えないため、

または偽りがその魂を欺かないためである。

卑しいものの魅力は善を曇らせ、

欲情のうずは潔白な心を堕落させる。

かれはわずかの間に完成されて、長い歳月を満たした。

その魂は主によみされたので、

主はかれを急がせて悪の中から出した。

人々はこれを見ても悟らず、

次のことを気にもとめなかった、

(3) 第二の部分の終わりである本節は、はじまりの3¹³と同様、最後の審判を背景としている。子のない義人の徳の実が現われるように、悪人の子は親の悪の証人として現われる。

(4) 義人は報いとして長寿の恵みを受けるということが、十戒(出20¹²、申5¹⁶、エフエソ6²⁻³)、その他の箇所(例、シラ1¹²)にあらわれている。この第三の部分(7¹⁰節)は、祝福さるべき義人がこれに反して若死にした場合を考察したものである。本書の著者は、旧約聖書においてはじめて、この難点に対して次のように明確に答えている。(1) 人のまことの誉れは徳であって長寿ではない(7¹⁰節)。(2) この世で堕落の危険に襲われないうちに、きれいな状態で徳をそなえたまま早く死ぬことは、神の特別の恵みである(10¹⁵節)。(3) 申し分のない生活をした短命の義人は長寿の悪人をとがめ、義人の短命をあさける悪人はいつかは神にあさけられる(16¹⁰節)。この部分は、証聖者、特に聖スタニスラオ・コストカのように若くして死んだ聖人たちをたたえる典礼に用いられる。

(5) 本節は明らかにエノク(創5²⁴)に言及したもの。かれの一生は創5章にあげられている太祖たちのだれよりも数百年短い。本節の「神によみされ」「所を移された」と、創5²⁴のギリシア語訳とは同じ。シラ44¹⁶49¹⁴、ヘブライ11⁵も参照。本節にうかがわれるように、義人の死は、生命の終わりではなく、他の生命への移行を意味する。この思想は第三の部分の基礎となっている。

主に選ばれた者には恵みとあわれみがあり、
聖なる人には主の訪れがあることを。⁽⁶⁾

16 死んだ義人は生きてゐる悪人をとがめ、

すみやかに完成された若さは

年を重ねたよこしまな長寿をとがめる。

17 悪人は知者の最期をみるが、

かれに対する主の計らいも、

また主がかれを安全にした理由も悟らない。

18 かれらはそれを見てさげすむ。

しかし主はかれらをあざわらう。⁽⁷⁾

19 のちにかれらは不名誉なしかばねとなり、

死者の中で永遠に恥となる。

主は何も言えないかれらをさかさまに投げおとし、

かれらを根もとからゆり動かす。

かれらは全く荒らされ、

うめき苦しむ、

15 主に選ばれた者には恵みとあわれみがあり、

聖なる人には主の訪れがあることを。⁽⁶⁾

16 死んだ義人は生きてゐる悪人をとがめ、

すみやかに完成された若さは

年を重ねたよこしまな長寿をとがめる。

17 悪人は知者の最期をみるが、

かれに対する主の計らいも、

また主がかれを安全にした理由も悟らない。

18 かれらはそれを見てさげすむ。

しかし主はかれらをあざわらう。⁽⁷⁾

19 のちにかれらは不名誉なしかばねとなり、

死者の中で永遠に恥となる。

主は何も言えないかれらをさかさまに投げおとし、

かれらを根もとからゆり動かす。

かれらは全く荒らされ、

うめき苦しむ、

かれらについての記憶は消え去るであろう。

最後の審判における義人と悪人⁽⁸⁾

20 罪が数えられるとき、かれらはふるえおののきながら現われる。

かれらの罪悪は面と向かってかれらをとがめるであろう。

5 1 そのとき義人は、かつてかれを圧迫した者ら、

その労苦をさげすんだ者らの目の前に、

大いなる自信をもって立つであろう。

(6) 原文の14節後半と15節からなる文章は文法的には不完全。しかしだいたいの意味は、17節にも出るのである。イザヤ57:1-2と同じ。

(7) 詩24参照。次節における悪人が死者の中でうける恥と、神からうけるきびしい罰に関する叙述は、バビロン王の運命を述べたイザヤ14:1-2に示唆されたものであろう。

(8) この第四の部分(4:20-5:23)は最後の審判における義人と悪人の比較を描いたもの。(イ) 義人の確信(5:1)と悪人の恐怖、驚き、むだな後悔(4:20-5:1)。 (ロ) 悪人のまちがった人生観(2:1-20)についての告白(5:4-13)。 (ハ) その告白に対する著者の肯定(5:14、悪人の人生観に対しては2:14で否定)、義人の報い(5:15-16)、結びとして最後の審判を啓示するような文体で描かれた悪人の永遠の滅び(17-23節)。 悪人の滅びは、神の義人に対する保護および悪人に対する報復を証明するものである。5:15-19(16-20)は殉教者のための典礼文として用いられている。

- 2 これを見てかれらはいたくおじおそれ、
 思いがけない義人の救いに驚く。
 3 かれらは悔やんで互いに言い合い、
 心のもだえにうめきながら言う、
 4 「かれは以前われわれが笑いぐさにし、
 あざけりのままとした者だ、われわれは愚かだった。
 5 かれの一生は狂ったものであり、
 かれの最期は不名誉なものと思った。
 6 どうしてかれは神の子のうちに加えられ、
 聖者の中にはいる身となったのだろう。⁽¹⁾
 7 実にわれわれは真理の道を踏み迷った。
 8 義の光はわれわれの上には輝かず、
 太陽もわれわれのために上らなかつた。
 9 われわれは不法と滅びの道をたどって疲れはて、
 道もない荒れ野を横切って行つた。
 10 しかしわれわれは主の道知らなかつた。⁽²⁾

- 8 われわれの高慢がなんの役に立ったか。
 9 富とたかぶりはわれわれに何をもたらしたか。
 10 これらはすべて影のように、
 また走り去る飛脚のように、
 11 あるいは波間を進む船のように過ぎ去つた。
 通りすぎたあとも、
 12 波を切つたりゆう骨のあとも見せない。⁽³⁾
 13 大空を飛ぶ鳥は、
 その飛びあとをしるさない。
 14 軽い大気はそのはばたきで打たれ、

【注】(1) 悪人は、神の子としての義人の誇りをむなししいものと思つていたが(2¹³16)、ついにその事実を間接に認める。本節の「神の子」「聖者」は、おそらく神の玉座を囲む天使たちをさしたものにちがいない(創3²²とその注11、詩89〔88〕¹、参照)。義人が死後天使たちの中に同化されていくように描かれている。

(2) 悪人は、一方では快楽を飽きるほどむさぼり、他方では憂うつと味気なさを経験するが、どちらの場合においても主の道を見いださない。

(3) 悪人の高慢と富は過ぎ去るものであるということが、9、10節に述べられている。また13節には、悪人の生命はまたたくまに過ぎ去り、通つたあとも残さないということが、述べられている。10節は9節につながるものがあり、11、12節は13節のたとえとしてしるされたものである。

はげしい勢いでかきわけられ、
つばさの動くままに道をひらく。

しかし大氣を通ったそのあととは何もない。

12 矢が的に向かって放たれるとき、

空気が切りさかれるが、またすぐもとに返る。

それで矢の道はわからない。

13 このように、われわれも生まれるとすぐになくなり、

徳のあとを示すことができず、

悪のさなかに滅びてしまった⁽⁴⁾。

14 悪人の望みは風に吹きとばされるもみがらのようであり、

あらしに追いはらわれるしぶき^{*}のようである。

それは煙のように風に吹き散らされ、

一日で去った旅人についての思い出のように過ぎ去ってしまう。

15 しかし義人は永遠に生きる。

かれらの報いは主のうちにあり、

かれらはいと高き者の配慮にあずかる。

16 それゆえかれらは輝く王冠と、

美しい冠とを主の手から受ける。

主は右の手でかれらをおおい、

腕でかれらを守る。

17 主は熱心を武器として身によろい、

敵に復しゅうするために被造物を武器とする。⁽⁵⁾

18 主は義を胸あてとして身につけ、

正しいさばきをかぶるとしてかぶり、

19 敗北を知らぬ聖性をたてとして取り、

はげしい憤りをつるぎにとぎあげる。

17 18 19 20 21

(4) ラテン語訳は13節のあとに、「罪びとは地獄でこのように語った」とつけ加え、これを14節としている。したがって本章最後の節まで一節ずつずれている。

(5) 17節は続く諸節を総括したものである。(1)主がどのように武装するか(17節)は、18-20節に見られる(イザヤ59:17、詩71:1参照、なお新約のキリスト信者の武器については、エフエソ6:11、一テサロニケ5:8参照)。(2)主がどのように被造物を武器とするか(あるいはどのよう被造物に武装させるか)(17節)は、20-21節に見られる。これらは、イスラエル民族のエジプト脱出とカナン征服のときに見られた自然の力を想起させる。このことはあとではっきりと10:16、16:17、17:24、19:6に述べられている。

宇宙は主とともに狂える者と戦うであろう。

21 いなずまの矢はねらいを定めて放たれ、

強く引きしぼった弓なりの雲からの的をめがけて飛んでいく。

22 石なげからは怒りにみちたひょうが投げうたれ、

海の水はかれらに対して怒り立ち、

川の水は容赦なくかれらにおおいかぶさる。⁽⁶⁾

23 御力のいぶきはかれらに向かつておこり、

大風のようにかれらを吹き散らす。

不法は全地を荒れ果てさせ、

悪行は権力者の座をくつがえす。⁽⁸⁾

6 王たちよ、聞いて悟れ、⁽²⁾

地のはての国々を治める者たちよ、学べ。

第二編 知恵の性質と価値⁽¹⁾

王たちに必要な知恵

(6) いなずまとひょう(雹)については出9²⁵、ヨシユア10¹¹、サムエル下22¹⁶、海の水については出14²⁶、15⁴、川の水については士5²¹参照。

(7) 主の全能を示すいぶきのこと。「強い風」とも訳されている。「御力のいぶき」という訳語のほうが、1³に出る同じ原語の用法に一致するし、またイザヤ11⁴、30²⁷、ヨブ4⁹、出15⁷にも調和する。

(8) 著者は最後の二句に、原因(不法と悪行)と結果(荒廢、イザヤ6¹¹参照)をあげている。「王たち」に呼びかける次の部分への橋渡しとして、「権力者」という語をここに出している。

【注】(1) 第二編(6-9章)は本書の中核をなすものである。著者はソロモン王を登場させ、王が全世界の王たちに呼びかけているように語っている。まず知恵を求め愛するようという勸告(6-21)から始め、ついで知恵はどのようにして得られるか、知恵とは何か、知恵は何をもたらすかを述べるために、ソロモンにその経験を語らせている(6²²-8¹⁶)。そして最後に、知恵を求める祈りをソロモンに唱えさせている(8¹⁷-9¹⁸)。

(2) ラテン語訳は、1節として「知恵は力に、賢い人は強い人にまさる」という句で始まる。したがって、ギリシア語本とは一節ずつずれている。なお2節のあとにラテン語訳はもう一句つけ加えているので、2節からは二節ずつずれている。注参照。

2 群衆を治め、

数多い民を誇る者たちよ、耳を傾けよ。

3 あなたがたの権能は主から与えられ、

主権はいと高き者から与えられたのである。

4 主はあなたがたのわざを調べ、あなたがたの企てを探る。

あなたがたが主の国のしもべでありながら正しくさばかず、

おきてを守らず、

神のみ旨のままにあゆまなかつたから。

5 主はいかめしく、すみやかにあなたがたに襲いかかる。

上に立つ人々にはきびしいさばきがある。⁽³⁾

6 最も低い人にはあわれみのゆるしがあり、

強い者には強い罰がある。

7 万物の主はだれをもはばからず、

偉大なものをも恐れぬ。

小さいものも大きいものもみずから造って、

すべてのものをひとしく計らう。

3

4

5

6

7

8

2 群衆を治め、

数多い民を誇る者たちよ、耳を傾けよ。

3 あなたがたの権能は主から与えられ、

主権はいと高き者から与えられたのである。

4 主はあなたがたのわざを調べ、あなたがたの企てを探る。

あなたがたが主の国のしもべでありながら正しくさばかず、

おきてを守らず、

神のみ旨のままにあゆまなかつたから。

5 主はいかめしく、すみやかにあなたがたに襲いかかる。

上に立つ人々にはきびしいさばきがある。⁽³⁾

6 最も低い人にはあわれみのゆるしがあり、

強い者には強い罰がある。

7 万物の主はだれをもはばからず、

偉大なものをも恐れぬ。

小さいものも大きいものもみずから造って、

すべてのものをひとしく計らう。

8

しかし力ある者にはきびしい調べがかかる。

9

君主たちよ、わたしのことばはあなたがたに対するものである。

10

あなたがたが知恵を学ぶため、またつまりずかないために。⁽⁴⁾

11

聖なることを神聖に守る者は聖とされ、

12

それを学んだ者は、弁解のすべを見いだすであろう。

13

それゆえ、わたしのことばを求めよ。

14

それを慕えば、教えはあなたがたのものになる。

知恵は求める者にみずからあらわれる⁽⁶⁾

15

知恵は輝かしく、衰えることがない。

13

12

11

10

9

た義務の怠りを意味する。

(3) モーセ(民20¹²)、ダビデ(サムエル下12⁷⁻¹⁵24¹⁰⁻¹⁷)、セナケリブ(列下19³⁵1³⁷)がその例である。

(4) 「つまりずく」は、ここでは統治者としての義務を怠ること。したがって一般読者にとっては、身分に応じた義務の怠りを意味する。

(5) 審判において一生の行為について神から説明を求められたときのいいわけ。ヨブ31¹⁴参照。

(6) この部分では、知恵は擬人化され、若い美しいおとめのように描かれている。8²では、ソロモンが知恵の美しさに魅せられて、知恵を花嫁として求めたとなっている。13¹⁶節と、雅3²、格8¹⁻⁴、シラ15²とを比べよ。知恵は神から発しており、また人を神に導くから、その美しさは、この世の婦人の美しさとは異なり、衰えることがない(12⁷26)。知恵は、ソロモンが話しかけている王たちを、永遠に王とする(20¹21節)。13¹⁶節において

自分にふさわしい者を求めて歩くと描かれている知恵は、人の意志にさきだつ助力の恩恵にたとえることができよう(ヨハネ6:44¹⁰、一ヨハネ4:10参照)。

(7)「知恵のはじまりは、教えを受けようというまことの望みであり」とも訳される。本句は、20節を結論とする連鎖式論法の第一環である。

(8) ラテン語訳はこのあとに、「すべて民のさきに立つ者よ、知恵の光を愛せよ」を入れて、23節としている。

(9) ソロモンは、22-24節で、いかに自分が余すところなく知恵について語ろうとしているかを示している。創造のはじめからの「22節」は、著者が歴史をたどって知恵の行動について示した10-19章に言及しているようである。22a-23節(例、「奥義」「明るみに出す」)は、入信者にだけ教義を教えた密儀教の信者を対象としたものらしい(14:23参照)。知恵を公に示す理由が24節にあげられている。すなわち賢明な人が多ければ多いほど、世は救われるからである。

自分を愛する者にはたやすく見られ、
自分を求める者に見いだされる。

13 知恵は、自分を求める人々にみずから姿をあらわす。
14 朝早く起きて知恵を求める者はほねおることがない。
かれは自分の戸口にすわっている知恵を見いだすであろう。

15 知恵に思いをこらすことは最高の賢明であり、
知恵を思つて目ざめている者は、すみやかに憂いのない人となる。

16 知恵は自分にふさわしい者を求めてめぐり歩き、
路上でやさしくかれらに姿を見せ、
またあらゆる思いのうちでかれらにあらわれる。

17 知恵のまことのはじまりは、教えを受けようという望みであり、
教えを受けようという心は知恵に対する愛である。

18 愛は知恵のおきてを守ることであり、
おきてに注意することは不朽の基であり、
不朽は人を神に近づかせる。

19 つまり知恵に対する望みは人を王座に導く。

20

21 それゆえ民の君主たちよ、王位と王しやくを好むのであれば、
知恵を敬え。永遠に王となるように。⁽⁸⁾

22 知恵を語るソロモンの登場⁽⁹⁾

23

24

また人をむしばむねたみと道をもとにしない。
ねたみは知恵となんのかかわりもないから。

知者の多いことは世の救いであり、

賢明な王は民の柱である。

わたしのことばから教えを受けよ。

それはあなたがたを益するものとなる。

ソロモンの知恵は生まれつきのものではない

7 1 わたしとしてすべての者と同じく死にゆく者である。

土で形づくられた最初の者の子孫であり、

母の胎内で肉の形をうけ、

2 人のたねとともねの楽しみとにより、

十月とつきの間に血で固まった。

3 わたしも生まれでて、同じ空気を吸い、

同じ土の上に生みおとされ、

みなと同じうぶ声をあげ、

4 うぶぎにつつまれ、心づかいのうちに育てられた。

5 王の中でこれと異なる生命のはじまりをもつ者はいない。

6 生命にはいるすべての人の入口は一つであり、出口もただ一つである。

どのようにしてソロモンは知恵を得たか

7 それゆえわたしは祈った。すると賢明を授かった。

8 わたしはせつに願った。すると知恵の霊がわたしの所に来た。

9 わたしは知恵を王しやくや王位よりもとうとび、

それに比べれば富は無であると思った。

10 わたしはそれを世の寶石にたとえたこともない。

11 その前ではすべての黄金は一握りの砂であり、

12 銀はその前ではどろと思われる。

【注】(1) 土のちりで形造られたアダムのこと(創27、なお本書10参照)。次の三句に見られる胎児発育の過程は当時の考えによるもの。すなわち胎児は、母の血が酵素の働きをする精子によって胎内で固まったものと考えられていた。ヨブ10⁸⁻¹¹、詩139(138)¹⁰⁻¹⁵、マカバイ下7²²参照。

(2) 直訳では、「同じく感じる土の上にわたしは落ちた」。だれが生まれおちても、土のほうでは同じように感じるという意味。

(3) このようなたとえは教訓書によく見られる。例、ヨブ28¹⁵⁻¹⁹、格3¹⁴⁻¹⁵⁻¹⁶。

10

わたしは健康や美よりもそれを愛し、

光よりもそれを選んだ。

その輝きは消えることがないから。

11

知恵とともによいものがすべて同時にわたしに來た。

その手の中には数えきれない富があった。

12

知恵がこれらを連れてくるので、わたしはそのすべてを喜んで受け入れた。

しかし、わたしは知恵がこれらの母だとは知らなかった。⁽⁴⁾

13

邪心なく学んだわたしは、惜しみなく分け与える。

わたしはその富をかくさない。

14

知恵は人にとってつきない宝であり、

これを得る者は神とよしみを結ぶ。⁽⁵⁾

受けた教えの恵みによって推薦されるから。

知恵について語るまえの祈り⁽⁶⁾

15

願わくは神がわたしを助けて思うままに語らせ、

授かった恵みにふさわしい考えを起こさせてくださるよう。

20

靈の力と人の推理、

19

生きるものの性質と野獣の気質、

18

時のはじめと終わりと中間、

至点の移動と季節の変化、

17

宇宙の構成と元素の力、

存在するものについての誤りない知識をわたしに与えたのは神である。

16

いっさいの賢明とわざの知識も神の手にある。

われわれもわれわれのことばも、

知者の指導者でもある。

神は知恵の案内者でもあり、

(4) 7-12節は列上3:5-14(特に13-14節) 5:12にもとづくものらしい。知恵を求めるソロモンの祈りは9章にあげられている。

(5) あるギリシア語本では、「用いる」。

(6) ソロモンは、すべてに関する深い知識だけでなく、それらをふさわしく話す力をも与えられるようにと神に祈る。かれは17-20節において、当時の科学、すなわち宇宙論、物理学、時間測定法、天文学、動物学、鬼神学、心理学、植物学に触れ、その博学を示す(列上4:20-34参照)。かれにこれらの科学を教えた師は知恵である(21節)。22節からは、この知恵について語る。

植物の識別と根の効用とをわたしは知った。

見えないものも見えるものもすべて、わたしは知るようになった。

万物の造り手である知恵がわたしに教えてくれたから。

知恵の属性⁽⁷⁾

21 知恵には神聖でそう明な霊がある。

また、それは唯一、多様、微妙であり、

敏しよう、明敏で、汚れなく、

確かで、苦しみを与えず、善を愛し、鋭く、

22 何ものにもはばまれず、恵みぶかく、情けがあり、

堅固、安全で、憂いがなく、

なんでもでき、なんでも見張り、

どんなそう明な、清い、

最も微妙な霊にも行きわたる。

23 知恵の動きはいっさいの動きにまさり、

その清さのゆえに、すべてのものにしみとおりに行きわたる。

24 知恵は神の力のいぶき、

全能者の栄光から流れでる清いものである。

それゆえその中には汚れたものは何一つはいらない。

25 知恵は永遠の光のてりはえであり、

神の働きを映すくもりがない鏡であり、

全善のかたどりである。⁽⁸⁾

26 知恵は一つであるが、すべてができ、

自分のうちにとどまって、すべてを新たにす。

(7) 知恵は、その本性が崇高かつ内的であるため、この部分では、神から発する一つのベルソナのように描かれている。15節の「神」、21節の「知恵」、22節の知恵に内在する「霊」は、三位一体の三つのベルソナをさすものだと考える教父が多い。字義上、これは三位一体の奥義を示すほどの深い意味をもつものではないが、このようにい方は、三位一体の奥義が新約において啓示される前の準備としての働きをしている(次注と1注。参照)。知恵の属性は27節に二十一(7×3、完全をあらわす数とみなされている)あげられている。これらの術語はほとんど、神または神の霊を説明するための当時の哲学用語と同じ。中には、二つ以上の意義をもつものもある。またある術語の一つの意義と他の術語の一つの意義とが互いに一致する場合もある。

(8) キリストを「神の栄光の輝き」として描いているヘブライ13は、本章27節に由来するものと思われる。コロサイ115、ヨハネ1。参照。22節にあげられている知恵の第三の属性、「唯一」というギリシア語は、キリストをさすヨハネ14の「御ひとり子」と同じ。

また世々にわたって聖なる魂に移りゆき、
かれらを神の友とし、預言者とする。

28 神は知恵とともに住む人のほかはだれも愛さない。

29 知恵は太陽よりも美しく、

あらゆる星座の上にある、

光と比べてみてもすぐれている。

30 やみは光と入れ代わる。

しかし悪が知恵に勝つことはない。

8 1 知恵ははてからはてまで力を及ぼし、

すべてのものを慈悲ぶかく計らう。

知恵の持参金はすべてにまさる⁽¹⁾

2 わたしは若い時から知恵を慕い求め、

それをわたしの花嫁にしようと努め、

その美しさに心奪われる者となった。

3 知恵は神との親密な交わりによってその生まれのとうとさを輝かす。

4 万物の主が知恵を愛したから。

知恵は神の知識を授けられ、

神のわざを選ぶ者である。⁽²⁾

5 富が人生において望ましいものであるならば、

どんな仕事でもできる知恵より富んだものがあるろうか。⁽³⁾

6 仕事のできる者が賢明であるならば、

すべてのもののうち、だれが知恵よりすぐれた造り手であろうか。

7 人がもし義を愛するならば、

知恵が働いて徳を出す。

【注】(1) 知恵は神と親密な関係にあるためすべてにまさる(7:25-26、なお8:3-4参照)と述べたソロモンは、続いてここに、知恵と親密になる者が受ける利益を説く。知恵の持参金はすべてにまさるので、ソロモンは知恵を花嫁にしようと努力する(6:12-16とその注6参照)。まず2-4節には概説が述べられ、5-8節には知恵のもたらす一般的なたまもの、9-16節には特に支配者に与えられる知恵のたまものがあげられている。そして結びの17-21節には、知恵のたまものを神に祈り求めようというソロモンの決心が示されている。ソロモンの祈りは9章に見られる。

(2) 神は何をするにも知恵と相談して行なう。擬人化されている知恵はここでは、全能の神から選択を任せられてるように描かれている。

(3) 知恵のもたらす持参金は、富(5節)、実用的な賢明(6節)、義(7節)、すなわち節制、賢明、正義、剛きの四つの徳の総合、博識(8節)であり、これらはすべてにまさる。

知恵は節制と賢明、

正義と剛きとを教える。

人生において、これらよりも人に益するものはない。

8 またもし人が博識を得ようとするならば、

知恵は昔を知り、未来をおしはかり、

ことばのあやを悟り、なぞを解き、

しるしと不思議と、

季節と年代のなりゆきを予見する。

支配者に対する知恵の価値⁽⁴⁾

9 それゆえわたしは知恵を伴りよとして迎え入れようと決めた。

知恵は幸福なときの助言者、

憂いと悲しみのときの慰めであることをわたしは知っている。

10 知恵によってわたしは多くの人々のうちに誉れを得、

若くても⁽⁵⁾長老たちの間で敬われるであろう。

11 さばきのときのわたしの鋭さは認められ、

14 わたしはもろもろの民を治め、

国々はわたしに従うであろう。

15 暴君たちはわたしの名を聞くだけで恐れる。

わたしは民にはやさしく、

12 わたしは権力者の目には驚きとなるであろう。⁽⁶⁾

わたしは黙すれば、人々は待ち、

わたしが話せば耳を傾け、

わたしが長く語れば手を口にあてる。⁽⁷⁾

13 知恵によってわたしは不滅を得、

後の世の人々に永久の記念を残すであろう。

14 わたしはもろもろの民を治め、

国々はわたしに従うであろう。

15 暴君たちはわたしの名を聞くだけで恐れる。

わたしは民にはやさしく、

(4) 9 節は前の部分の結びであり、またこの部分の出発点である。知恵は、ソロモンを誉れ高い賢人(10-13節)、人々からは恐れられる勇敢な支配者(14-15節)、私生活においては悩みのない人とする(16節)。

(5) 列上3:7参照。ある伝説は、ソロモンが王位についたのは十四歳のときであったと言っている。

(6) 本節前半はおそらく、裁判官としてのソロモンの有名な判決(列上3:16-28)に関するもの。後半の「権力者」はソロの王ヒラムやシバの女王などをさす(列上5:14-15[4:34-5:7]10-16)。ラテン語訳は本句を二重に訳している。二つとも意味はだいたい同じ。

(7) 知恵に対しては反ばくできないので、慎んでうやうやしく承るといふ尊敬のしるし(ヨブ21:29, 40:4参照)。

戦いには勇しく見えるであろう。

家にもどれば知恵のかたわらにいかう。

知恵との交わりに苦しみはなく、

知恵とともに住むことに悲しみはなく、

かえって楽しみと喜びがあるから。

知恵を求めるソロモンの決心

17 わたしは内心このように考え、

また心のうちに次のことを思いめぐらした。

知恵と縁を結ぶことに不滅があり、

18 それを愛することに清い喜びがあり、

その手のわざにつきない富があり、

それとの交わりを深めることに賢明があり、

知恵からことばを賜わることには名譽がある。

こう考えて、わたしはどのようにして知恵を自分のものにしようかと捜し求めた。

19 わたしは生まれのよい子で、

9
1

「父祖の神、あわれみの主よ、

知恵を求めるソロモンの祈り⁽¹⁾

運よく善良な魂に恵まれた。

20 いやむしろわたしは善良であり、汚れないからだにはいった。⁽⁸⁾

21 しかし神が与えるのでなければ、知恵を持つことはできないと知り、⁽⁹⁾

——またそれがだれの恵みかを知ることが賢明なことである——

わたしは主のほうに向かい、主に願ひ、

心をつくしてこう言った。

9
1

「父祖の神、あわれみの主よ、

(8) 著者は前節ですぐれた肉体のことをさきにあげ、次に善良な靈魂のことを述べている。このことから読者が両者の優劣について誤解しないように、本節でその順序をかえて述べたのであろう。著者はここで靈魂の先在説や輪廻説や原罪の結果に触れているのではない。

(9) ラテン語訳では、「しかし神が与えるのでなければ、わたしは貞潔を守ることができないと知り」。このことは真理ではあるが、ギリシア語原文の意味するところではない。

【注】(1) このソロモンの祈り(列上3:1、歴下1:7、10参照)は、次の四部に分けられ、そこにはソロモンが知恵のたまものを求めた理由が見られる。(A) 神はあわれみ深く、信実であり、権能と知恵をもっている(1-4節)。(B) ソロモンは人間であるが、王としての責任、とくに神殿建築の使命を帯びている(5-8節)。(C) 王としてのつとめをふさわしく果たすために、神の道、意志、および神の氣に入ることが教えるのは知恵である(9-12節)。(D) 死す

2 あなたはみことばによって万物を造り、
知恵をもって人を形づくりました。

3 それは、あなたの手になった被造物を人に支配させ、
聖と義で世界を治めさせ、

4 正しい魂でさばきを行なわせるためでありました。

5 あなたの玉座のかたわらにすわっている知恵をわたしに与え、

6 わたしをあなたの子らの中から追い出さないでください。

7 わたしはあなたのしもべであり、あなたのはしめの子です。⁽³⁾

8 弱くて命が短かく、

9 さばきと律法にくらい人間です。

10 人の子らのうちで完全な者であっても、

11 あなたからの知恵が欠けていれば、その人はむなししい者とみなされます。

12 あなたはわたしを選んであなたの民の王とし、

13 あなたをむすこ、娘らを治める者としました。⁽⁴⁾

14 あなたはわたしに命じました、あなたの聖なる山の上に神殿を、

15 あなたのやどる都に祭壇を築き、

16 これをあなたがはじめから備えた聖なる幕屋のかたどりとするように。⁽⁵⁾

17 知恵はあなたとともにいます。それはあなたのわざを知り、

18 あなたが世を造ったときにも立ち会い、

19 何があなたの気に入るか、

20 何があなたのいましめにかなうかを知っています。

21 聖なる天から知恵をつかわし、

22 あなたの光栄の座から知恵をお送りください。

べき人間の本来の弱さ(13-16節)。17-18節は、歴史にあらわれた知恵の働きについて述べる10章への橋渡しとなっている。

(2) 神がただことばだけで万物を創造したこと(創1章)をさす。「父祖」は、アブラハム、イサク、ヤコブ(創32、出6)、およびダビデ(12節)にいたるまでのイスラエルの先祖たち。

(3) 買い取られて奴隷となったヘブライ人は六年たてば解放されたが(出21)、生まれながらの奴隷はそうではなかった。神のしもべとしてのイスラエル人の一般概念については、レビ25を見よ(詩86〔85〕16〔15〕16参照)。

(4) 神はアブサロムやアドニヤよりも弟ソロモンを王に選んでいる(列上15-11〔13-30〕)。イスラエル人をさして神の「むすこ、娘ら」という表現は、ここ以外にはイザヤ43、だけに見られる(なおニコリント6参照)。

(5) 神殿建築に関するソロモンの使命は、サムエル下7〔12〕、列上5〔16-19〕〔3-1〕に示るされている。「聖なる山」はエルサレムのモリヤ山のこと(歴下3)。ソロモンは、荒れ野における幕屋(出25〔40〕)、さらに正確には、後の聖書に描かれるような天のエルサレムにおける神の永遠の住まい(ヘブライ8〔2〕〔9〕、黙11〔13〕〔15〕参照)にかたどって、全焼納祭壇つきの神殿を建てる使命を持っていた。

それがわたしとともに住んで働き、

わたしがあなたによみされるものは何であるかを知るために。

11 知恵はすべてを知り、かつ悟り、

わたしが事を行なうとき、わたしをさかしく導き、

その栄光⁽⁶⁾をもってわたしを守ります。

12 そしてわたしのわざは受け入れられ、

わたしはあなたの民を正しく治め、

父の玉座にふさわしい者となるでしょう。

13 だれが神のはかりごとを知りえましよう。

だれが主のみ旨をおしはかれましよう。

14 死すべき者の考えはおびえており、

わたしたちの計画は確かではありません。

15 朽ちるからだは魂の重荷となり、

地上の幕屋は心配の多い精神に重くのしかかります⁽⁷⁾。

16 わたしたちは地にあるものをかるうじておしはかり、

手近にあるものも労して見いだします。

17 天にあるものをだれが探り出せるでしょう。

もしあなたが知恵を下さらず、

また上からあなたの聖霊を送らなかつたならば、

だれがあなたのはかりごとを知りえたでしょう。

18 こうして地上の人の道は直くされ、

人々はあなたによみされるものを教えられ、

知恵によって救われたのです」。

(6) 「栄光」はここでは権能の意味。ローマ64の場合と同じ。

(7) ヨブ49、二コリント4 5-14参照。現世におけるわれわれは、旅の重荷と労苦にひしがれている旅人のようなものである。われわれが来世の住まいにたどりつき真の幸福を味わうとき、肉体は栄光にみちた救い主の復活体のように靈的なものとなる(一コリント1541-48参照)。

第三編 歴史にあらわれた知恵の働き⁽¹⁾

第一部 宇宙創造からエジプト脱出まで

アダムとノア

10

1

知恵は最初に形づくられた世の父が、

造られてただひとりいたとき、かれを守った。⁽²⁾

またかれをその墮落から救い出し、

かれに万物を支配する力を与えた。

しかし、あるよこしまな者が怒って知恵を離れ去り、

おこつて兄弟を殺したかどで滅びうせた。⁽³⁾

かれゆえに地が洪水にのまれたとき、知恵はふたたびそれを救い、

粗末な木にのせて義人を導いた。⁽⁴⁾

アブラハムとロト

諸国の民が悪に組して混乱を招いたとき、

知恵は義人を見分け、かれを神のまえにとがなき者として守り、⁽⁵⁾

子に対する愛情にひかれないうようにかれの強さを保った。

知恵は、悪人らが滅びゆくとき、義人を救い出し、

【注】(1) 第三編は次の三部に区分される。(イ) 宇宙創造からエジプト脱出までの歴史にあらわれた知恵の働き(10-12章)。(ロ) 知恵に反する偶像崇拜の愚かさ(13-15章)。(ハ) エジプト脱出当時のイスラエル人とエジプト人との比較(16-19章)。

(2) アダムのふさわしい助け手エバがまだ造られていなかった時の状態をさしているようである(創3:18-20参照)。次句は原罪(創3章)に関するもの。

(3) カインのこと(創4:1-16)。次節では、カインの罪がかれの子孫の罪ゆえにおこった洪水(創6:1-22参照)に結びつけられている。

(4) 「粗末な木」とは木で造られた箱船のこと。義人ノアについては、創6:9参照。「導く」のギリシア語は「水先案内をする」という意。

(5) 5節第一行と第二行では、バベルの人々の高慢の罪とことばの混乱が(創11:1-9)、直接アブラハムの召し出し(創12:1)に結びつけられている。「見分ける」(直訳では「知る」)、「ユリント8:3参照」というギリシア語は、ここでは創18:9の「選ぶ」というヘブライ語の思想を反映している。第三行は、自分の子イサクをいけにえにしようとしたアブラハムの剛きの徳を述べたもの(創22章)。

7 五つの町(6)にふりかかる火からのがれさせた。
これらの町の悪の証拠として、

地は荒れ果てて煙を吹き、
木は実を結ぶが熟す(7)ことがなく、

不信仰の魂の記念として塩の柱が立っている。

8 つまり知恵の前を素通りした者らは、

善の見分けがつかなくなったただけでなく、

その愚かさの記念を世に残していった。

9 それでかれらはその誤りを隠すことができない。

しかし知恵は自分に仕える者を困難から助け出した。

ヤコブ(8)

10 知恵は兄の怒りからのがれるひとりの義人を、

正しい道にみちびき、

かれに神の国をしめし、

聖なる物についての知識を与え、

その辛苦のうちに栄えさせ、

その働きを豊かに実らせた。

11 知恵は圧迫者の強欲に悩むかれのかたわらに立ち、

かれを富ませた。

12 知恵はかれを敵から保護し、

待ち伏せする者から守って安全にし、

はげしい戦いに勝たせた。

それは、敬けん(9)が何よりも強いことをかれにわからせるためであった。

(6) 創14²⁻¹³にあげられている五つの町のこと、ソドム、ゴモラなど。これらの町に住む人々の罪、滅亡、ロトの脱出は、創18¹⁶⁻¹⁹に示るされている。

(7) いわゆる「ソドムのりんご」のこと。外観は良いが内部は乾燥して灰のようである。不自然な地熱が原因だと考えられていた(前句、申32³²参照、なお創13¹⁰と比べよ)。次句はロトの妻のこと(創19²⁶)。

(8) 10-12節はヤコブの一生のおもな出来事に関するもの。すなわち、ヤコブがエサウから逃げたこと、ベテルでかれが見た夢、ラバンのもとにおける成功、ラバンから追跡されたこと、エサウとの遭遇、天使との組み討ちなど(創27⁴¹⁻³³)。

(9) ヤコブの敬けん(9)は、祈り(創32¹⁰⁻¹³)と天使の祝福を熱心に願ったこと(同章カ-11節)の中にはっきりあらわれている(ホセア12⁴参照)。本句は、ヤコブの熱心な祈りの力が夜中の組み討ちにおいてかれに勝利をもたらしたのである、ということをはほめかしているようである。この勝利はエサウとの遭遇を恐れていたヤコブに自信を与えている。

13 知恵は売られたひとりの義人を見捨てず、

罪の危険からかれを救い出した。

14 知恵はかれとともにろうやに下り、

鎖につながれたかれを離れなかった。

ついにはかれに王しやくをもたらし、

しいたげる者をおさえる力を与え、

かれをそしった者の偽りをあかし、

かれに永久の栄光を与えた。

モーセと選民

15 知恵は、聖なる民、とがなき民族を、

圧迫する民から救い出した。

16 知恵は主のひとりのしもべの魂にはいり、

ふしぎとするしで恐ろしい王たちに逆らった。⁽¹¹⁾

17 知恵は聖なる人々にその労苦の報いを与え、⁽¹²⁾

かれらをふしぎな道に案内し、

昼はかれらのためにおおいとなり、

夜は星の炎となった。⁽¹³⁾

18 知恵はかれらに紅海を渡らせ、

多量の水の間を導いた。

19 しかし知恵はかれらの敵に大波をかぶせ、

深いふちの底からかれらを吐き出した。⁽¹⁴⁾

20 それゆえ義人らは悪人らの物を取り上げた。

(10) ヨセフは兄弟たちによってエジプトに売られ、ポテバルの妻の誘惑にあい、投獄され、後にはエジプトの宰相になる(創37:39-41章参照)。

(11) ファラオの前で奇跡を行なったモーセのこと(出3-12章参照)。

(12) エジプト人に対して無償で働いたイスラエル人は、そこを去るにあたってエジプト人の財宝を取った(出

3:21-22, 11:2-3, 12:35-36参照)。

(13) 昼のふしぎな雲、夜の火の柱をさす詩的描写(18:19, 出13:21-22、詩78(77)105(104)39)。

(14) 出14:19参照。出エジプト記には、イスラエル人は岸に横たわっているエジプト人の死体を見た、ということがしるされているだけである(出14:30)。次節は、イスラエル人がエジプト人の死体から武器をはぎ取ったというエダヤ伝承に一致する。

11
1 主よ、かれらはあなたの聖なるみ名をうたい、
こぞって守護のおん手をたたえた。
21 知恵がおしの口をひらき、
幼な子の舌に歌わせたから。⁽¹⁶⁾

11
1 知恵は聖なる預言者の手によって、

かれらのわざを栄えさせた。

2 かれらは住む人もない荒れ野をよぎり、
道もない荒れ地に天幕を張った。

3 かれらは敵に立ち向かい、あだをしりぞけた。
かれらはかわいたとき、あなたに呼びもとめた。⁽¹⁾

4 すると水が切り立った岩から出て、かれらに与えられ、
かれらのかわきは堅い石からいやされた。

かれらのかわきは堅い石からいやされた。

「水はエジプト人を害し、イスラエル人を救う」⁽³⁾

5 かれらの敵を罰するために用いられたそのものが、
かれらの乏しいときの恵みとなった。⁽⁴⁾

6

絶えず流れる飲み水の川は、

どすぐろい血でにごった。

7

(15) 著者は選民の一員として、勝利の賛歌(出15:1-21)をうたったモーセと選民に心を合わせている。神に対するこの直接の呼びかけは、次章から神を二人称で呼ぶ用意である(11注1後半参照)。

(16) モーセは神に呼ばれたとき、おしのようにであった(出4:10, 12, 30)。イスラエル人全体もこのように、神を賛美するにあたってはおしか子どものようにみなされている。知恵はかれらの口を開き、神の賛美ができるようにした(詩83、マタイ11:25, 21:16参照)。

【注】(1) ここからは、14:25の場合を除き、神がイスラエルの歴史の中で知恵に代わって直接間接にあらわれる(例、息、ことば、腕、手)。またここから、著者は10:20の場合と同じく神を二人称で呼んでいる(10注15参照)。

(2) この語は、ギリシア語訳の申8:15に用いられているものと同じ。モーセ五書のギリシア語訳中ではただ一回しか用いられていない(詩114(113)にも出る)。このまれな語と同じものがここに出てくることから、著者が水の奇跡に言及していることがわかる。この奇跡については、出17:1-7、民20:2-13参照。

(3) この部分(5:14節)はイスラエル人と、エジプト人に関する七つの比較の第一のものである。第二から第七までの比較は16-19章に見られる(注8参照)。この第一の比較は、ナイル川の水が血に変わったというエジプトにおける第一の災害(出7:17-24)と、荒れ野で岩から流れ出た恵みの水(前注参照)とを扱ったものである。水が血に変わったのは、ファラオが命令(出1:16, 22)を出して幼児を殺害させたための罰であると、著者は6:1-7節で述べている。16節の応報の原理参照。

(4) 本句はラテン語訳では二重に訳されている。第一の訳「イスラエルの子らはこれをあふれるほど賜わって喜んだ」は、ナイル川沿岸に住むエジプト人が水に悩んでいるときに、エジプトの北東部ゴセン地方に住むイスラエル人は豊かに水を得た、ということを意味したのもかもしれない。第二の訳はギリシア語原文の意味に近い。これはラテン語訳では6節となっている。

7 これは幼児殺害の命令を出したための罰である。
 これに反して、あなたは思いがけなくかれらに豊かな水をお与えになった。

8 そのときあなたはかれらのかわきを利用して、⁽⁵⁾

9 かれらにはむかつた者をどのように罰したかを悟らせた。

10 かれらは試みられたとき、これは慈悲のこらしめにすぎないのだが、

11 怒りでさばかれた悪人らがどのように苦しんだかを悟った。

12 かれらに対しては、あなたは戒める父としてかれらをためし、

13 あの者らに対しては、罰するきびしい王として取り調べた。

14 かれらがいた時もうなくなってからも、あの者らは同じく苦しんだ。⁽⁶⁾

15 あの者らは過ぎ去ったことを思いだし、

16 二重の嘆きとうめきを味わった。

17 自分らに罰となったものが相手の者には恵みとなったと聞いて、

18 あの者らは主の御手を感じた。

19 かつて裸で捨てられた者⁽⁷⁾を、あの者らはあざけりしりぞけたが、

20 事のなりゆきを見て驚嘆した。

21 あの者らは義人とは異なるかわきを味わったのである。

神の寛容⁽⁸⁾

15 あの者らは不義ゆえの愚かな考えに迷わされ、

16 理性のないはらばうもの、またとるに足りない生き物を拜んだ。

17 その報いとして、あなたは理性のない生き物の群れをかれらの上に送られた。

(5) ラテン語訳では本句のあとに、「自分の者らを高め」という句を置いている。

(6) イスラエル人のエジプト滞在中也脱出後も、エジプト人は苦しんだという意味。エジプト人が荒れ野におけるイスラエル人のための水の奇跡を聞き、またこのことからかれらがかつての水ききんの罰を思い出したということが前提となっている。次節の「二重の嘆き」は、この奇跡に対するねたみと過去のながい思い出のことである。

(7) 川べりに「捨てられ」(出12:23)、ファラオの前であざけられたモーセのこと(出5章)。

(8) 著者は、血の災害に続いて起こった動物による災害(出7:25-8:28 10:1-20)をここに取り上げている。このため、イスラエル人とエジプト人に関する七つの比較(注3参照)をあげようとした計画をしばらくおく。著者はまずエジプト人の動物礼拝に触れ、人は罪を犯すすがとしたもので罰されるという応報の原理(15-16節)を述べ(12%参照)、次に、罰するにあたっての神の寛容(17%節)、およびその寛容の理由(11:21-12%)をあげている。これに引き続いて12:1-22では、後のイスラエルの敵カナン人に対する神の寛容とその理由を述べている。12:23-31でまた、動物による災害に触れ、11:15-16の応報の原理をさらに詳しく述べ、次に、不道徳のはじまりともいえる偶像崇拜の問題を13章から15章までの三章にわたって論じている。そして最後の所(15:16-16%)でまた、動物による罰に触れ、11:15-16と12:23-31で述べた応報の原理をもう一度あげている。次に、この動物による罰の思想を発展させて、これと対照的な動物の利用を取り上げ、七つの比較という本題に帰っている。すなわち、水に関連する第一の比較(11:14)に続いて、エジプト人が動物に悩まされたことと、これに反してイスラエル人が動物を食用としたり、青銅のへびによっていやされたこととを、第二の比較(16:1-11)と第三の比較(16:1-11)において扱っている。

16 これは、罪を犯すよすがとしたもので人は罰されることを、かれらに悟らせるためであった。

17 無形のものから宇宙を造ったあなたの全能の御手が、

かれらにくまの群れや勇猛なししを、

けしかける力に欠けていたのではない。

18 あるいは火の息を吐き、

あるいはうなる煙を吹き出し、

あるいは目から恐ろしい火花を放つ、

まだ世に知られない怒り狂う獣⁽⁹⁾を新たに造って、

かれらにけしかけることができなかつたのでもない。

19 これらの獣はかれらを害して、たちまち打ち砕くことができるだけでなく、

その形相だけでかれらをおびやかし、なきものにすることもできる。

20 これらのものがなくても、かれらがただ一息で倒され、

正義にせめられ、

あなたの権能の息で吹きとばされることもありえたのである。

しかしあなたは、ものさしと数とはかりをもってすべてのものを整えた。

21 大きな力はいつもあなたにある。

あなたの腕の力にだれがさからいえよう。

22 あなたのまえでは、全宇宙ははかりを傾けるだけであり、

また地上に降りる朝つゆの一しずくのようなものである。

23 あなたはすべてができ、すべての者をあわれみ、

人々が悔い改めるようにその罪を見のがす。

24 あなたは存在するものすべてを愛し、

造ったものは何一つ忌みきらわない。

もし憎いものがあつたとすれば、あなたはそれを形づくらなかつたであろう。

25 あなたが望んでいなければ、どうして物は存在しつづけることができよう。

また、あなたに召されなかつたものが、どうして保たれたであろう。

(9) 著者は、原始宇宙の状態を描いている創1:24の七十人訳を典拠にしている。物質の永遠先在説をとなえるギリシアの哲学者たちの考えとは異なる。

(10) 巨大な怪物を神話的に描いたヨブ41:15-18:13参照。

12
1

あなたの朽ちない霊がすべてに及んでいから。

2

あなたは罪におちた者を少しづつ懲らし、

罪を犯すよすがとなったものを使ってかれらに注意を与え、かれらを戒める。

主よ、これはかれらを悪から遠ざけ、かれらにあなたを信じさせるためである。

カナン人に対する神の寛容

3

あなたは、あなたの聖地の昔の住民を憎まれた。

4

かれらが最もいとわしいこと、

魔法のわざと不敬な祭式を行なったから、

5

かれらが子どもを無慈悲にも殺し、

人肉のうたげを開いて、はらわたを食い、

血なまぐさい祭りの最中に狂って教えにはいり、

6

か弱い者の生命を断つ親たちであったから、

あなたはわれわれの父祖の手でかれらを滅ぼそうと決心された。

7

それは、すべてのうちで、あなたにとって最もとうといこの地が、

8

ふさわしい移民である神の子らを受け入れるためであった。

しかしかれらもやはり人間であったので、あなたはかれらをやさしく扱い、

くまばちをあなたの軍のさきがけとして送り、

かれらが徐々に滅びるようにした。

【注】(1) 神が人や被造物に生命を与えるために吹き入れた「命の息」のこと(創2763722、ヨブ2733341415、詩1041032930、シラ127)。本句のラテン語訳は、「ああ主よ、あなたの霊は万物の中にあつて、いかによく、かつ甘美なものであるう」。

(2) このような異教的悪習については、申18914参照。このうちで最もいまわしい祭式である幼児の人身ごくりが、続く二節に描かれている。

(3) カナン人が(イスラエル人もときどき)幼児の人身ごくりを行なったことは、聖書(レビ1821、申1231、エレミヤ73119、3235、エゼキエル1621、列下2310—モアブ王については、列下327)の中にも、考古学上にもはっきりあらわれている。著書はカナン人の祭儀よりもギリシアの祭儀によく通じていたと考えられるので、節の祭儀的人肉摂取はおそらくギリシア的なものであるう。カナンにおいて人肉摂取が行なわれたという証拠は、ほかの箇所には見られない。「はらわたを食う」は術語であつて、いけにえの奉獻者がうたげの初めにあつて、人身ごくりにされた者の心臓、肝臓、肺臓、じん臓(腸は除く)を食べることを意味する。

(4) ギリシア語本の本句は全く不明。原文批判参照。著者は古代ギリシアの密儀教を思いつかべて本句を作つたようである。密儀教への入信は、狂喜乱舞のうちに行為なわれ、いけにえにされた者の血がほとばしり出るとき、祭りは興奮の極に達する。カナンでは、祭壇のまわりで、血がほとばしり出るまでわが身を傷つけて踊り狂う祭儀があつた(列上1828—29参照)。

(5) 出2328、申720、ヨシユア2412参照。しかし、ここでは、くまばちを送つて徐々に罰する動機は悔い改めの時を与えるため(2節参照)となつており、出、申、ヨシユアの参照箇所の場合と異なる。

9 それは、あなたが戦いによって悪人を義人の手に渡すことや、

恐ろしい獣や、きびしいことばによって、

かれらをつかのまにうち砕くことができなかつたからではない。

10 むしろかれらを徐々に罰してかれらに悔い改めの時を与えるためであった。

あなたは、かれらの生まれが悪く、その悪が生まれつきのものであることや、

かれらの思いがいつまでも変わらないことを、知らなかつたのではない。

11 かれらのはじめからのろわれた子孫であつたのである。⁽⁶⁾

寛容の理由

あなたがかれらの罪を罰しなかつたのは、だれかを恐れたからではない。

12 「何をあなたはしたのか」とだれがあなたにいえよう。

だれがあなたのさばきにさからうことができよう。

あなたが造つた民をあなたが滅ぼしたからといって、だれがあなたをとがめえよう。

不義の人のための復しゅう者として、だれがあなたの前に立ちえようか。

13 すべてに心を配る神はあなたのほかにはない。

それゆえ、あなたのさばきが不義でなかつたことを示す必要はない。

14 あなたに罰された者らのために、

あなたに対決できる王も君主もない。

15 正しいあなたはすべてを正しく計らい、

罰すべきでない者を罪することは、

あなたの権能にもとると考えている。

16 あなたの力は義の基であり、

あなたは万物の主であり、そのためにこそあなたは万物を惜しむ⁽⁷⁾。

17 人があなたの無限の力を信じないとき、あなたはその力を示し、

人がそれを知りながらあなたにいどむとき、あなたはそれを懲らしめる。

18 あなたは力ある主であるから、公平にさばき、

寛大にわれわれを計らう。

あなたが欲するとき、力はあなたのかたわらにひかえている。

(6) カナン人の先祖であるカナンに対するノアののろい(創9²⁵)をほのめかしたものであろう。

(7) 限りある力しかもたない人間は、めしたの者に対しては過度に自分の力を示そうとする。しかし、神は、自分の力が認められないときにだけそれを示し、そしていどまれたときにだけその力を使う(次節)。このように、神はまずモーセを通じてファラオの前に奇跡を行ない(出7¹⁰⁻¹³)、それでもファラオがかたくななので、災害を送った。

この寛容が教えるもの

- 19 あなたは、こうすることによって、あなたの民に、
義人は情けある者でなければならぬことを教え、
またあなたは、罪の悔い改めが認められることを、
あなたの子らに希望させた。
- 20 あなたの子らの敵で、死にたいする人々を、
あなたは慎重に軽く罰し、
悪を改める機会と時とをかれらに与えたのである。
まして、あなたの子らをさばくにあたっては、どれほどの注意を払ったことであろう。
- 21 かれらの父祖たちに、あなたは誓いと契約とよい約束をしてくださったのである
から。
- 22 それゆえ、あなたはわれわれを戒めても、
われわれの敵には万倍のむちを与えられる。
われわれが人をさばくときには、あなたのいつくしみをわれわれに考えさせ、
さばかれるときには、あなたのあわれみに望みをかけさせるためである。

悔い改めないエジプト人への嚴罰⁽⁸⁾

- 23 あなたは、不義のうちに愚かな生活を送った者を、
かれらが用いた忌むべきものによって苦しめた。
- 24 かれらはあまりにも遠く迷いの道をさまよひ、
生き物のうちで最も卑しい醜いものを神々にまつりあげ、
愚かな幼な子がだまされるようにだまされた。
- 25 であるから、わきまえのない子どもにするように、
あなたはあざけりのようなさばきをかれらに送られた。
- 26 しかし、冗談のような懲らしめに心を改めない者は、
神の正義にふさわしいさばきにあわなければならぬ⁽⁹⁾。
- 27 かれらは自分らが神々と思つたものによって罰せられたのを見て、
苦しみ、それらのものに対して怒り狂い、

(8) ここで著者は、エジプト人が、うけた動物による災害に考えをもどす(11注8参照)。
(9) 「冗談のような懲らしめ」は、かえる、ぶよ、はえによる最初の災害(出8章)をさすものであろう。この
ような災いは、直接傷害をうけることよりもわずらわしいものである。「神の正義にふさわしいさばき」は、最後
の災害、すなわちういこの死(出11:12²⁹⁻³⁰)をさすものであろう。

かつて知るのを拒んだおん者をまことの神として認めた。
かくて最後の罰がかれらにふりかかった。⁽¹⁰⁾

第二部 被造物礼拝⁽¹⁾

天体と自然の礼拝

13

1

神を知るにいたらなかった人はすべて、生まれつきの愚か者⁽²⁾である。

かれらは目に見えるよいものをおして存在⁽³⁾するおん者を知ることができず、

またそのみわざに目をとめながら、その造り手を認めなかった。

2

かえって、かれらは、火、風、はやて、星のめぐり、さかまく波、

天に光るもの⁽⁴⁾、世界をつかさどるこれらのものを神々とみなした。

それらの美しさを見て喜び、それらを自分たちの神々とするかれらであるならば、

それらの主がどれほどすぐれているかを知ることができずではないか。

それらを造ったのは、美の創始者であったから。

また、それらの力と働きに心を打たれるかれらであるならば、

6

しかしこの人々の責めは軽い。

かれらは神を求め、見いだそうと欲しながら、

5

それらを形造ったおん者がどれほど力強い御かたであるかを、
そのことから悟ることができずではないか。
被造物の偉大さと美から推しはかり、

その造り主のことを認めることができる。

(10) ファラオ王もエジプト人も第十の災害にあって神の手を認めるようになったが、心から悔い改めていなかった。ファラオはふたたび心をかたくなにし、軍隊を送ってイスラエル人を追跡させたので、最後の嚴罰としてその軍隊は紅海におぼれた(出14章)。

【注】(1) この部分(13-15章)は被造物礼拝を扱ったもので、このあとには、11章に始まってすぐに中断されたイスラエル人とエジプト人の比較が続く(10注1、11注8参照)。被造物礼拝は、天体と自然の礼拝(13-15)と、偶像崇拜(13¹⁰-15¹⁷)に大別され、後者のほうがはるかに悪いとされている。15¹⁸⁻¹⁹には、被造物礼拝のうちで最も悪質なものとして、動物礼拝があげられているが、これは、12章の終わりで中断された動物による災害にもどるためのものであり、16章への橋渡しの役をしている。

(2) 大自然を礼拝し、それを造った神を礼拝しない者は、「愚か者」と呼ばれている。かれらの行為はゆるさるべきものではない(8節、なおローマ1²⁰⁻²¹参照)。しかしその責めは、「あわれ」(10節)な者と呼ばれている偶像崇拜者より軽いとされている(6節)。

(3) 「存在するおん者」は神の名称であり、七十人訳の出3¹⁴に用いられているギリシア語をそのまま取ったものである。

(4) 創1¹⁴⁻¹⁸とその注7参照。

迷うのかもしれない。

7 かれらは神のわざをよく知っているので、神を捜し求める。

しかしかれらは外観にだけ心をとめる。

目にうつるものがまことに美しいから。

8 とはいえ、かれらをゆるすわけにはいかない。

9 宇宙について推しはかれるほどの

知力をもったかれらであるならば、

なぜもっと早く、それらのものの主を見いださなかったのか。

偶 像 崇 拝

10 しかし死物に希望をかけ、

人の手になるもの、

金や銀の細工、生き物の模造、⁽⁵⁾

昔の人の作品である無益な石を、

神々と呼ぶ者らはあわれである。

11 ⁽⁶⁾ここにひとりのきこり木工がいる。かれは手ごろな木を切りたおし、

手ぎわよくその皮をみなはぎとり、

たくみに細工し、

12 日常の生活に役立つ器を造り、

その手仕事の木くずを使って、

食事を準備し、腹をみたす。

13 かれは、なんの役にもたない残りの木くず、

曲がったふしだらけの木を手にとり、

怠慢な熱心さでそれを彫り、

暇つぶしの心で形をつくり、⁽⁷⁾

人の姿に模造し、

14 または価値のない生き物にかたどる。

(5) 「生き物の模造」は、エジプト人が用いた半人半獣の偶像のことかもしれない。

(6) 11節には、イザヤ44:17、エレミヤ10:3-5、バルク6章の思想があらわれている。また表現も似かよっている。著者はひどい皮肉を用いて、偶像製作のことで、偶像が製作者の助けとならなうことを述べている。13節以下は、偶像が全く無価値であることを、ひどくあざけたものである。

(7) 13節は「偶像製作を特に巧妙に皮肉ったものである。他の写本では、「それを手にして技能をつくして彫り、なれた手つきで形をつくり」という皮肉ぬきの表現となっている。しかし、本訳がとった読み方のほうがはるかに句を生かし、著者の意向に沿っているようである。

それを朱で塗り、その表面を赤くいろどり、
すべてのきずを塗りかくす。

15 またそれにおさわししい場所をつくり、
壁の中におさめて、鉄でとめる。

16 このようにかれは気をつかって、それが落ちないようにする。
それには自分をささえる力がないことを、かれは知っているから。

実にそれは像であり、助けを必要とする。

17 それでも、かれは財産、結婚、子どものためにそれに祈り、
魂のないそのものに向かって話すのを恥と思わない。

また健康のためにもその弱いものに呼び求める。

18 かれは死物に命を求め、

また全く力のないものに助けを願い、

足を使えないものに旅の安全をこいねがう。

19 金もうけ、技能、また仕事の成功のために、

全く無能な手をもつものに力を願う。

14 1 船旅に出て荒波を渡ろうとする人は、

2 自分に乗せてゆく船よりもろい木によび求める。⁽¹⁾

3 船は利益めあての欲望によって考え出され、

4 船大工の知恵⁽²⁾がそれを造りあげた。

5 しかし父よ、あなたの摂理⁽³⁾はそれを案内する。

6 あなたは海の中にも道をもうけ、

7 波間にも安全な小道をそなえられた。

8 このように、あなたは人をいかなる危険からも救いだせることを示される。

9 だから、不慣れな者でも船に乗れるのである。⁽⁴⁾

【注】(1) 古代人は航海のたびに、船のへさきに飾った偶像に祈った(へさきの偶像については使28¹¹参照——ディオスクロイというしるしは、ゼウスから生まれたふたご、カストルとポルックスの像で、船乗の守護神)。船のへさきの偶像は単なる飾りにすぎなかったため、その材料はもろい木片でまにあつた(13^{13a}参照)。したがって、船体の水にひたつた部分よりも腐っている場合が多かった。

(2) 人間の知恵の中に反映している神の知恵のこと(8、出31、35³¹参照)。航海にたえる船はこの知恵によって造られるが、そのへさきにつける無用な偶像はそうではない。神の知恵が人間の知恵を照らす真意は、節⁸に見られる。

(3) 全人類の父として、神は人のあらゆるよい行ないを見守り、指導する。「摂理」というギリシア語が出るのは、ギリシア語旧約聖書中ここがはじめてである(次は17²に出る)。キリストは山上の説教(マタイ6²⁵⁻³⁴)において、摂理について詳しく語る。

(4) おそらく本節は、節⁶でノア(世の希望)のことを述べるための用意であろう。節の「いかだ」も同様

それを朱で塗り、その表面を赤くいろどり、
すべてのきずを塗りかくす。

15 またそれにおさわししい場所をつくり、
壁の中におさめて、鉄でとめる。

16 このようにかれは気をつかって、それが落ちないようにする。
それには自分をささえる力がないことを、かれは知っているから。

実にそれは像であり、助けを必要とする。

17 それでも、かれは財産、結婚、子どものためにそれに祈り、
魂のないそのものに向かって話すのを恥と思わない。

また健康のためにもその弱いものに呼び求める。

18 かれは死物に命を求め、

また全く力のないものに助けを願い、

足を使えないものに旅の安全をこいねがう。

19 金もうけ、技能、また仕事の成功のために、

全く無能な手をもつものに力を願う。

14 1 船旅に出て荒波を渡ろうとする人は、

2 自分に乗せてゆく船よりもろい木によび求める。⁽¹⁾

3 船は利益めあての欲望によって考え出され、

4 船大工の知恵⁽²⁾がそれを造りあげた。

5 しかし父よ、あなたの摂理⁽³⁾はそれを案内する。

6 あなたは海の中にも道をもうけ、

7 波間にも安全な小道をそなえられた。

8 このように、あなたは人をいかなる危険からも救いだせることを示される。

9 だから、不慣れな者でも船に乗れるのである。⁽⁴⁾

【注】(1) 古代人は航海のたびに、船のへさきに飾った偶像に祈った(へさきの偶像については使28¹¹参照——ディオスクロイというしるしは、ゼウスから生まれたふたご、カストルとポルックスの像で、船乗の守護神)。船のへさきの偶像は単なる飾りにすぎなかったため、その材料はもろい木片でまにあつた(13^{13a}参照)。したがって、船体の水にひたつた部分よりも腐っている場合が多かった。

(2) 人間の知恵の中に反映している神の知恵のこと(8、出31、35³¹参照)。航海にたえる船はこの知恵によって造られるが、そのへさきにつける無用な偶像はそうではない。神の知恵が人間の知恵を照らす真意は、節⁸に見られる。

(3) 全人類の父として、神は人のあらゆるよい行ないを見守り、指導する。「摂理」というギリシア語が出るのは、ギリシア語旧約聖書中ここがはじめてである(次は17²に出る)。キリストは山上の説教(マタイ6²⁵⁻³⁴)において、摂理について詳しく語る。

(4) おそらく本節は、節⁶でノア(世の希望)のことを述べるための用意であろう。節の「いかだ」も同様

- 5 あなたは知恵のわざがむだになることを望まれない。⁽⁵⁾
 6 それで、人々は非常に薄い船板に命を託し、
 7 いかだで無事に波のうねりを乗り切ったのである。
 8 その昔、かの高慢な巨人が減んでいくとき、⁽⁶⁾
 9 世の希望はいかだによってのがれ、
 10 あなたの手に導かれて世に子孫のたねを残した。
 11 正義をもたらす木は祝せられ、⁽⁷⁾
 12 人の手になる偶像はのろわれる。
 13 そのものも、それを造った人も、もろともに。
 14 かれはそれを造ったからであり、
 15 それは朽ちはてるものなのに、神と名づけられたからである。
 16 悪をなす者もその悪もひとしく神に憎まれ、
 17 造られた物も造った人も、ともに罰せられる。
 18 それゆえに異邦人の偶像にも、さばきが下る。⁽⁸⁾
 19 それは被造物の中で忌むべきものとなり、
 20 人々の魂のつまずきとなり、

12 偶像を考え出すことはかんいん⁽¹⁰⁾のもつであり、

偶像崇拜の起源⁽⁹⁾

愚か者の足をとらえるわなとなるからである。

に、6節で箱船(「いかだ」)のことを述べるための用意であらう。10⁴では、箱船の水先案内をしたのは「知恵」となっており(10注4参照)、本章3節⁵では、船舶一般の水先「案内」をするのは「摂理」となっている。
 (5) 神は「知恵のわざ」(おそらくここでは天然資源のことであらう)が片すみに隠されることなく、全人類のために配分されることを望む、というのが本句の意味であらう。

(6) 創6⁴、およびソドムとゴモラの悪人に関する10^{6a}の類句参照。

(7) ノアの箱船のこと。聖パウロが申21³の「木」を十字架にあてはめたように(ガラテヤ3¹³)、多くの教父たちはこの「木」を十字架の木の意に解している。

(8) 直訳では「訪れ」。2注6参照。

(9) いやしむべき偶像製作(13¹⁰⁻¹⁶)と偶像の無力とその憎むべきこと(13¹⁷⁻¹⁴)とを述べおわった著者は、次に偶像崇拜の起源(12¹⁻²¹節)と道德上の墮落(22¹⁻³¹節)を述べる。その起源の説明にあたって二つの例があげられている。すなわち、(1)子を失った父が悲しみのあまりその子の像を造り、それを神聖視したこと(15¹⁻¹⁶節)、(2)暴君が自分の像をつくらせたことや、臣下が暴君のさげんをとろうとしてかれの像をつくったこと(17¹⁻²⁰節)。21節はこの二つの例を一括したものである。

(10) 人類が唯一の神を離れて偶像に走った場合を表現する語として、聖書によく用いられている(特に選民イスラエルに適用)。著者は本節で次の部分(22¹⁻³¹節)の主題、すなわち偶像崇拜による生活の腐敗にちよつと触れ、それを詳述する前の準備として、ここに偶像崇拜の起源を述べている。

13 これを造り出すことは生活の腐敗である。
これらのものは初めからあったものでもなく、

また永遠に存在するものでもない。

14 人の虚栄によって偶像は世にはいつた。

15 そのために、それらにはすみやかな終わりが定められている。⁽¹¹⁾
ここに、時ならぬ悲しみにやつれはてたひとりの父がいる。

かれは急に取り去られた子の像を造り、

死んだ人間であった者を今は神のように尊敬し、

自分の家の者らに、秘教と祭式を伝えた。

16 そして時がたつにつれて、その不敬ならわしは固められ、おきてのように守られた。
また暴君たちの命令によって、刻まれた像があがめられるようになった。

17 遠くに住む人々は、暴君たちを目の前にして尊敬することができなかつたので、

はるかにかれらの姿を思い浮かべ、

尊敬すべき王とそっくりの、見える像を造った。

これは、熱心のあまりそこにいない者にそこにいるようにへつらうためであった。

18 造り手の功名心は王を知らない者までもかりたて、

この崇拜を広めた。

19 おそらく造り手は権勢ある者の気に入ろうと思い、

その似姿を無理に実際よりも美しいものに細工して造った。

20 大衆はその作品の美に心をひかれ、

少し前まで、人間として尊敬していた者を、

今は、礼拝すべきものとみなすようになった。

21 このことは世の人々にとって、わなとなった。

不幸や暴虐のとりことなった人間は、

帰してはならない名を石と木に与えた。

偶像崇拜の結果

22 このように、かれらは神を知ること迷うだけで満足せず、

無知からおこる大きな戦い⁽¹²⁾のうちに住みながら、

(11) すべてよくできた神の創造物(創1:31参照)の中に、偶像を割り込ませたのは、神の計画ではなく人間の考えによるものである。人間は偶像を「考え出した」(12節)が、神は偶像がまもなく破壊されることを「定めた」。

(12) この「戦い」は、心の中の戦い(ローマ7:23参照)、すなわち原罪によって悪に傾いた人の内心に起こるも

そのようなひどい悪を平和とよんでいる。

かれらは子を殺す祭式やひそかな儀式をなし、

あるいは異様な式において狂喜乱舞のかぎりをつくし、⁽¹³⁾

もはや生活も結婚も清く守ることなく、

互いにすきをうかがって殺し合い、あるいは私通をして苦しめ合う。

つまり、見られることはただ流血と殺害、盗みと欺き、

腐敗と不忠実、騒動と偽証。

よい人たちに対する乱暴、恵みに対する忘恩、

靈魂の汚損、不自然な肉欲、

結婚の混乱、かんつう、卑わいなことだけである。

名もない偶像⁽¹⁴⁾をあがめることは、

あらゆる悪のもとであり、原因であり、きわみである。

かれらは快楽に熱狂したり、偽りの預言をしたり、

あるいは不義の生活を営んだり、軽々しく偽証したりする。

かれらは魂のない偶像にたより、

いつわりの誓いをして、罰を受けるとは思っていない。

15

しかし、われわれの神よ、あなたは慈悲深く、真実で、忍耐がよく、

イスラエル人は偶像を崇拜しない⁽¹⁾

よこしまな者が誓いをかけるものの力ではなく、
罪びとに対するさばきである。

30

しかし次の二つの罪のゆえに、さばきがかれらに臨むであろう。

それは、かれらが偶像に心をとめて、神を悪く思い、

また、神聖なものをさげすんで、不正に誓ったことである。⁽¹⁵⁾

31

かれらの犯罪をたえず追跡するのは、

のと、人間同志の争いとの二様に解される。23-31節にはそれらの例があげられている。これらと、ローマ1:26-32のとを比べよ。なお、エレミヤ6:4(平和がないのに、かれらは、『平和、平和』という)参照。

(13) 12とその注3,4参照。

(14) 「存在しない」の意。古代においては、ものは名をつけられてはじめて、その存在がじゅうぶんに確立されるときみなされていた(創1注3参照)。23節の「魂のない偶像」という類似的表現参照。

(15) 誓願は神に誓うものであるから、その性質上神聖なものである。したがって、偽りの誓いはその神聖さをおかす。

【注】(1) 著者は偶像崇拜の悪い結果(14:22-31)を述べたのち、この部分(15:1-6)において、イスラエル人に対する神の摂理とあわれみ、およびその権能を知り偶像に走らないイスラエル人の好運について語っている。イスラエル人はまことの神を知っていたので、墮落から救われたのである。神を知ること「正義」であり、「不死のもと」

- すべてをあわれみをもって計らっておられる。
 たとえ罪を犯しても、われわれはあなたのもののである。
 われわれはあなたの権能を知っている。
 しかし、われわれは罪を犯さないのである。
 あなたに属するものであることを知っているから。
 あなたを知ることが完全な正義であり、
 あなたの権能を認めることは不死のもとである。
 よこしまな技巧を使う人の企ても、
 絵かきによるむだな仕事も、
 さまざまな色でぬりよごされた姿も、
 われわれを迷わすことはない。
 愚か者はそれを見て恋い慕い、
 息のない姿をした死んだ像に思いこがれる。
 偶像をつくる者や、それを慕う者や、拜む者は、
 悪い物を愛しているのであり、このような望みにふさわしい。

- 7
 焼物師はほねおって柔らかい土をこね、
 われわれの使ういろいろなものを形造る。
 また同じ粘土で、清い使用にあてられる器と、
 その反対の用にあてられるものとを、すべて同じように造る。
 この二とおりの器のそれぞれに、
 その用途を決めるのは粘土細工人である。⁽³⁾
 かれはよこしまなほねおりをもって、同じ粘土でむなしの神を造る。
 すこし前に土から生まれたかれは、
- 8
 (3) 節、なお15,5,15, ヨハネ17, 参照) であり、これと反対に、息のない死んだ像に望みをおこす偶像崇拜者は「愚か」であり、「このような望みにふさわしい」(5) 節) とされている。4-6 節に含められている偶像製作に関する語は次の部分(7-13 節)の用意である。
 (2) 偶像崇拜を非難する著者は、はじめにその製作方法に言及し(14 注、参照)、この箇所でも偶像製作者の愚かさ(7-13 節)を述べて終わっている。はじめ(13,11-16)には木像、ここには土の像を、例としてあげている。偶像製作が罪であるという意識は、安っぽい材料を使う粘土細工人のほうに、他の細工人の場合よりも強い(13 節)。
 (3) 焼物師が自分の造ろうとする物に対して絶対権をもっていることを、聖パウロも例としてローマ9,21 にあげている。

すこし後にその借りた魂をかえすように求められるとき、
もとの土に帰ってゆく。

9

しかしかれは、衰えゆく身の上にも、

すぐに果てゆくその命にも心をとどめず、

金細工人や銀細工人と競い、

青銅の細工人のまねをし、

にせものを造ることを光榮としている。

10

かれの心は灰であり、その望みはどろよりも価値がなく、

その命は粘土にも劣る。

11

なぜならば、かれは自分を形づくったおん者、

自分に生氣の魂を吹き入れ、

命の靈を与えたおん者を知らないからである。

12

かれは、われわれの生活を遊びごとだとみなし、

われわれの生がいを、利益のための祭りの市と考えている。

かれは、「どんなことから、悪からさえも、利を納めなければならない」と言う。

13

また、土でもろい器と偶像を造り出すこの者は、

自分が罪を犯していることを、他のだれよりもわきまえている。

エジプト人の愚かな偶像崇拜⁽⁶⁾

14

しかし、あなたの民を圧迫する敵はすべて、

最も愚かで、みどりこの魂よりもさらにあわれである。

15

かれらは国々の偶像をすべて神とみなしたから、

偶像の目は見る用をなさず、

鼻があっても、空気を吸えず、

(4) 粘土製の偶像を金銀製のように見せかけるために、通常うわぐすりがかけられる。しかし高価なものに見えるだけであって、中味は粘土であり、また神とみなされているが、実際は死んだ無力なものであるから、にせものである。

(5) 本節は創27「神ヤールウェは土のちりて人を形造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生き者となつた」を反映している。

(6) 著者はこの部分で偶像崇拜に対する非難を論じおわると同時に、次の二段階を経て、悔い改めないエジプト人への嚴罰という主題、すなわち12章の最後のところで中断された主題にもどる。(1) エジプト人はすべての国の神々をまつるので、かれらの偶像崇拜は特に愚かなことであり、子どもらしい。偶像の特徴を約言すれば、それらには生命が全然ないということである(11-13節)。(2) さらに悪いことには、エジプト人は醜いまわしい動物を拝む(18-19節、なお13注5参照)。

耳があっても、聞くことができず、
手の指があっても、ふれるためではなく、

またその足もあゆむ用をなさない。

16 それらを造ったのは人間であり、

靈魂を貸し与えられた者が、それらを形づくったのであり、

どんな人間でも自分に似せて神を形づくることはできない。

17 死すべき身のかれは、不法の手で死物を造り出す。

かれは自分が礼拝する物よりもまさっている。

かれには生命があるが、それには生命が全くないから。

18 かれらはまた最も憎むべき生き物さえも拜む。

これらの愚かさは他の生き物よりもさらにひどい。

19 生き物に見られる美しさを考えると、

これらには望ましいところが一つもない。

これらは神の賞賛と祝福から除かれているのである。

16

それゆえ、かれらはそのようなものによってふさわしく罰せられ、

多くの生き物によって苦しめられた。

第三部 エジプト脱出時の神の摂理

Ⅱ かえるはエジプト人を苦しめ、

うずらはイスラエル人のかてとなる。

(7) 本節の思想は、11節(注5参照)と8節(創319、シラ127参照)の思想に符合するものである。生命を他に与えることのできるのは神だけであるから、人間のように生命を与えられたものは、他のものの中に生命を造り出すことはできない、ということが本節に強調されている。

(8) 神は宇宙創造のとき、造ったすべての動物を見てよいとされ、それらに祝福を与えられた。エジプト人が造って礼拝した半人半獣の神々はそのとき存在していたものではない。

【注】(1) 神の賢明な摂理によるイスラエル人とエジプト人の運命の相違は、聖書の歴史の中にうかがわれる。この部分は、両者に関する七つの比較中の第二のものである(11注3、本章注4参照)。第一の比較(11:14)においては、水の問題、すなわちエジプト人に対しては水が血に変わり、イスラエル人に対しては荒れ野の岩から水が出たということが扱われた。著者はまた動物による罰(11注8参照)に触れ、これを第二と第三の比較の基礎としている。この部分(11節)においては、かえるによる第二の災害(出7:25-8:6)と、荒れ野においてうずらが神の恵みとして与えられたこと(出16、民11:32)とが扱われている。うずらは、肉に飢えていたイスラエル人を満

2 この罰にひきかえて、あなたはあなたの民をかえりみ、

かれらのはげしい欲望をかなえるために、

珍味な食べ物としてうずらをお与えになった。

3 かのものどもらは、食べようと思いがらも、

罰として下った生き物のいとわしさに、

必要な食欲さえ失った。

しかるにあなたの民は、しばらく飢えを感じたが、

珍味なものにあずかることができた。

1 圧迫者が容赦のない欠乏に見舞われるのは必要なことであった。

しかしあなたの民には敵がいかに苦しめられたかが示されるだけでした。

■ 青銅のへびはイスラエル人をいやし、

虫はエジプト人を苦しめる⁽²⁾

5 野獣のおそろしい怒りがかれらを襲い、

かれらがくねったへびにかまれて滅んでいったとき、

あなたの怒りは中途でやんだ。

6 かれらはしばらくうばいしたが、それは戒めのためであり、

かれらはあなたの律法のおきてを思い起こすための救いのしるしを授かった。

7 このしるしのほうに向いた者は、かれらが見たものによってではなく、

すべてのものの救い主であるあなたによって救われた。

8 あなたはこれによっても、あなたがすべての悪から救い出すおん者であることを、

われわれの敵におさとしになった。

9 敵はいなごとはえにかみ殺され⁽³⁾、

足させ(2節bと民11:18、詩78:77-79とを比べよ)、かえるはエジプト人のかまどやこねばらにまではいってき
て(出8:3)、かれらに健康のために必要な食欲さえも失わせた(3節a-c)。

(2) この第三の比較(5-14節)では、エジプト人がいなごとはえにかみ殺されたこと(9節a)と、くねったへ
びにかまれたイスラエル人がいやされたこと(10節)とが扱われている。「はえ」と「いなご」によるわざわいは、
エジプトにおける第四(出8:16-24)と第八(出10:1-15)の災害を典拠にしたものである(出8:13-16-17)のぶ
よによる第三の災害をも含んでいるのであらう——本書19:10参照。「くねったへび」は民21:4の「火のへび」の
こと。「救いのしるし」(6節b)は、モーセが造った「青銅のへび」のこと、これを仰いで見た者はいやされた
(民21:7)。キリストはこの「救いのしるし」を十字架にかけられるご自身の前表としている(ヨハネ3:14-15)。
著者は第二の比較において、イスラエル人がうずらをお与えられる前に不平を言ったことや、食べたあとで罰せられ
たこと(民11:15-33-34)には触れていない。ここでは、火のへびによってイスラエル人がかまれたことを、戒め
とみなし、罰だとは言っていない。

(3) ファラオがいなごによる災害を「この死」(出10:17)と呼んでいるだけで、エジプト人がかみ殺されたとい
う記事は出エジプト記にはない。

かれらの魂をいやすすべは見いだせなかった。
かれらはこのようなもので罰をうけるにふさわしいから。
しかしあなたの子らは、毒へびの齒にも負けなかった。

あなたのことばがかれらに思い出されるために、
かれらはかまれたのである。そしてすぐに救い出された。

それは、かれらが忘却のふちに落ち、

あなたの恵みを奪われることのないためであった。

かれらをなおしたのは、薬草や痛みをやわらげる薬ではなかった。

主よ、それはすべてをいやすあなたのことばであった。

13 あなたは生命と死の上に権能をもち、

よみのくにの門まで導き下り、また導き上るおん者である。

14 しかし人は、悪によって人を殺すことはできても、

去って行った靈魂をもどらせることはできない。

また、取り去られた魂を救い出すこともできない。

15 あなたの手からのがれることはできない。

16 あなたを知ること拒んだ悪人らは、

あなたの腕の力にむちうたれ、

ふしぎな雨とひょうと容赦ない豪雨とおそわれ、

火に焼きつくされた。

IV 自然はエジプト人を苦しめ、イスラエル人を助ける⁽⁴⁾

(4) イスラエル人とエジプト人に関するはじめの三つの比較は、エジプトにおける第一、第二、(おそらく第三)、第四、第八の災害に関するものである(注1,2参照)。第四の比較(16¹⁵⁻²⁹)においては、ひょうによる第七の災害とマナ、第五の比較(17¹⁻¹⁸)においては、くらやみによる第九の災害と火の柱、第六の比較(18⁵⁻²⁵)においては、エジプト人のういごを殺した第十の災害と、これに反して荒れ野で死の天使がイスラエル人から離れたこと、最後に第七の比較(19¹⁻¹⁰)においては、紅海がイスラエル人のために道を開いたことと、エジプト人をのんだこととが扱われている。著書は出エジプト記をよく知っており、こまかい点までとり入れてある。しかしちゅうちよすることなく、資料を案配したり組み合わせたり、また他の出所とくにユダヤ伝承からも資料を取ったりしている(次の二つの注と解説9-11ページ参照)。この第四の比較は二つに分けられる。(一)雷と雨——著者は19節で「火」と「水」と呼んでいる——をともなって天から降ったひょう(出9²³⁻²⁴ 33-34)が、エジプト人の作物に害を与えたことに対し、同じく天から降ったマナがイスラエル人のかてとなったこと(19²⁰節)、(二)エジプト人を罰するために、自然はその力を越えてきびしくなったが、イスラエル人を助けるためには、その力をやわらげたこと(24節、なお19¹⁸⁻²⁰参照)。

もつとも奇妙なことは、すべてのものを消し去る水の中であつて、かの火がいよいよその力を増したことである。

全宇宙は義人に味方する。

時として、炎はしずめられた。

それは悪人らの上に送られた生き物が焼き殺されないうためであり、

また、これを見たかれらに、神のさばきが迫っていることを悟らせるためであつた。

また、あるときは水の中でも、火はその力をこえて燃えさかつた。

それは不義の地の産物を滅ぼすためであつた。

これにひきかえて、あなたは天使の食べ物でああなたの民を養い、

できあがつたパンをかれらに天からお与えになつた。

かれらは勞せずしてそれを授かつた。

そのパンは甘味のすべてを有し、あらゆる味覚にかなうものであつた。

あなたが与えた物は、子らに対するあなたのやさしさのあらわれであり、

その味はそれを食する人の好みに応じて、

おのおのの望みどおりに變つた。

22

雪と氷は火に耐えて溶けなかつた。

これは、火がひょうの中でも燃え、雨の中でも輝き、

かれらの敵の産物を滅ぼすということを、

(5) 動物とひょう(雹)による災害が同時に来たようになっては、これは著者が劇的に描くためにいっしょにしたものかもしれない。あるいは、聖書にしろされてはいないが、エジプト人がぶよを追い払おうとして火をつけたが成功しなかつたことを意味したのもかもしれない(18節の「時として」参照)。出エジプト記によれば、ひょうが降る前に、川から出てきたかえるは全部死に絶え、はえも全滅している(出8:7-10:14)。また、いながらひょうの次に来たことになっている。しかしながら、ぶよがいなくなったということは、何もするされていない(出8:15-16:16)。

(6) 「天からのひょう」と対照的な「天からのパン」のことは、出16章に述べられている(詩78(77)25参照)。マナは次節では「ひょう」といい対照をなすように、「雪と氷」と呼ばれている(19:21参照)。これは、出16:14の「薄氷霜」に溶けた、およびギリシア語による民11:7の「氷の外観」という語に基づいたものである(20節の「天使のパン」もギリシア語による詩78(77)25から取つたものである)。出16:31には、マナの味は「みつのはいつたせんべい」のようだとされている(民11:8では「油菓子」)。神から直接与えられたこの食べ物の「甘味」は、子らに対する神の「やさしさ」をあらわしたものであると著者は言っている(21節)。マナがそれを食する人の味覚に合うようにその味を変えたということは(20:21b, なお25節参照)、ユダヤ伝承の中では、もっと詳しく伝えられてくる(民11:4と比べよ)。キリストは、「世に生命を与えるために天から下つたまことのパン」だと言っている(民11:4と比べよ)。ヨハネ6:31-35、41-52、58-59、なお一コリント10:3-4参照)。聖トマス・アクィナスは聖体の祝日の典礼文作成にあたり、マナに関する本書のこの部分を聖体賛美のために用いている。ラテン語訳の20節から取つた句は、聖体降福式のときの祝福の直前、先唱と後唱として一年中用いられており、よく知られている(解説20ページ参照)。

かれらに悟らせるためであった。
 火はまた、義人らが養われるために、

その自然の力さえも忘れた。

造られたものは、造り主であるあなたに仕え、

よこしまな者を罰するためには、きびしくなり、

あなたに信頼する者を恵むためには、やわらぐ。

つまり、被造物はあのとときもいろいろに変わり、

すべてを養うあなたの恵みのしもべとなり、

困っている人々の望みに応じたのである。

主よ、人を養うのはもろもろの産物ではなく、

あなたに信頼する人々を守るのはみことばであることを、

あなたの愛する子らが学ぶためである。

火にも滅びなかった物が、

一瞬の日の光に暖められただけで溶けた。⁽⁷⁾

これは、あなたに感謝をささげるために、日の出まえに起き、

暁にあなたに祈らねばならないことを教えるためであった。

17

29

感謝を知らない者の望みは、冬の霜のように溶け、

むだな水のように流れ去る。

V エジプトのやみとイスラエルの光⁽¹⁾

あなたのさばきは偉大であり、語るにはむずかしい。

(7) 雪や氷のように見えたマナは朝日には溶けた(出16²¹)が、なべで煮ても焼いても溶けなかった(出16²³、民11⁹)。著者は、この奇跡がイスラエル人に益をもたらしたことを、「ひょう」や「水」(すなわち雨)の中に燃えさかる「火」(すなわち雷)がエジプト人に害を与えたことと対照させている(17^{19,22}節)。著者はまた、太陽に溶けないうちにマナを集めるため、イスラエル人が早く起きなければならなかったことを、暁に起きて神のたまものを感謝せよ(28節)という神の指令のように解している。

【注】(1) この第五の比較においては、著者は自己の詩才を最大限に生かし、自由に描写している。出エジプト記では、第九の災害すなわちくらのやみに関する記事はたった三節(出10²¹⁻²³)だけであるが、著者はこれを本書において二十三節(17¹⁻¹⁸)にわたって述べている(ただし火の柱に関する18³は除く——出13²¹⁻²²参照)。すなわち次のように主題を詳述している。(一) 著者は前におこった他の災害のこともここに取り入れている(6¹⁰節)。(二) 良心のかしやくから生じる恐怖心を心理的に分析している(11¹⁵節)。(三) ユダヤ伝承から資料を取ったり、詩的想像をたくましくしたりして、くらのやみの恐ろしさを描いている。すなわちエジプト人はろうやに閉じこめられたように動けなくなり(26^{26,35-36}節、なお出10²³の「三日の間、人々は互いに見ることもできず、またその所から動く者もなかった」参照)、恐ろしい幻や音におびえた(36^{1-14,17-18}節)、としるしている。(四) 出エジプト記にしろされている三日に及んだくらのやみのことを、よみのくにのくらのやみに結びつけ、その前表であるとしている(13²⁰節)。(五) 刑罰を割りあてる神のさばきについて物語ることとは困難であると述べ、この深遠な神のさばきを第五の比較における題目、根本思想、また結論としている(1¹⁻³、18⁴、なお11¹⁶「罪を犯すよすがとしたもので人は罰される」参照)。

- 2 それゆえ、教えを受けようとしなかった魂は道に迷った。
 無法な者たちは、聖なる民をその権力のもとにおさめようと思った。
 しかし、かれら自身やみのとりことなり、長い夜にしばらく、
 また永遠の摂理から遠ざかり、屋根の下に閉じこめられた。
 3 ひそかな罪⁽²⁾を犯したかれらは、
 忘却の暗いとばりのもとに隠れていると思っていたが、
 4 追い散らされ、はげしくおののき、
 亡霊におびえた。
 身をひそめた隠れ場も、かれらを恐れから守らず、
 恐ろしい音があたり起こって、かれらをろうばいさせ、
 5 無気味な顔つきの陰気な幻が現われた。
 いかなる火も光る力をもたず、
 6 かがやく星のきらめきも、
 かがやく星のきらめきも、
 ああ憎むべき夜⁽³⁾を照らせなかった。
 7 自然に発した恐ろしい火の固まり⁽⁴⁾だけが、
 8 かれらの間にひらめいた。

- 7 かれらは、よく見えなかったその光景の中で見たものを、
 8 恐れあまり、いっそう恐ろしく思った。
 9 魔術のごまかしは力を失い、
 10 かれらの誇る賢明は、屈辱的宣告をうけた。
 11 病んだ魂から恐れと驚きを追い払おうとした者らが、
 12 かえって恐ろしい不安にとりつかれ、病む身となった。
 13 かれらを恐れさせるものは何ひとつなかったが、
 14 かれらは、生き物の通る音とへびのひゅうという声に驚いて逃げ、死ぬほどふる
 15 えた。
- (2) 14²³の「ひそかな儀式」をさしたものであろう。そうだとすれば、3-4節は第五の比較における神の報復の第二例である(第一例は、イスラエル人をとりこにしようと思つたエジプト人が、反対にやみのとりこになつたこと——2節)。すなわちひそかな儀式にあつた報いとして、くらやみの中に追い散らされ(身動きできないようになり——15-16節参照)、興奮の極(12注4参照)を味わおうとした報いとして、亡霊におびえて正気を失い、狂喜乱舞(14²³)のかぎりをつくした報いとして、あたりにおこつた恐ろしい音にろうばいした。
- (3) エジプト人にとっては憎むべき夜であるが、選民にとってはその反対である。聖土曜日(のろろく祝別式)においては、「エジプト人から奪ひ、ヘブライ人を富ませた、ああ実に幸いなこの夜」という句がとええられる。
- (4) 直訳では「(火葬のために)積まれた燃えているたきぎ」。おそらく著者は、瞬間的な明るさの中でよく見えなかつた物を大げさに想像して恐れているエジプト人の陰うつな様子を暗示するために、この陰気くさい語を用いて、雷のひらめき(第七の災害、出9²³⁻²⁴)をあらわしたのであろう。

10 かれらは避けることのできない空気にさえ、面することを拒んだ。⁽⁵⁾
 悪は宣告を受けるとき、生まれつきおく病であることを証明する。⁽⁶⁾

11 悪は良心に責めたてられるとき、常にその責苦を重く感じ恐れるからである。

12 恐れとは、理性からくる助けを捨てることにほかならない。

13 内心からの助けに自信がなければいけないほど、

責苦の原因を知らないことを重大視する。

14 全く無力な夜の間、

——無力なよみのくにの深みから出てきてかれらに臨んだから——
 かれらは同様な眠りをし、⁽⁷⁾

15 奇怪な幻に追われたり、

魂が虚脱して動けなくなったりした。

16 思いがけない突然の恐れがかれらを襲ったから。

17 こうして、そこにいた者はだれでも倒れ、

鉄のろうやでないろうやにかたく閉じ込められた。

18 農夫であろうと、羊飼いでであろうと、

ひとりで働く者であろうと、

17

不意に襲われ、避けられない運命のもとにおかれた。

すべての者は同じやみの鎖にしばられたから。

ひゅうと吹きわたる風の音、

あるいは枝のしげみのあちこちにさえざる鳥の声、

あるいははげしく流れる水の音、

あるいはなだれおちる岩石のすさまじい響き、⁽⁸⁾

(5) 7節は、第三の災害のときにモーセのまねをしようとして失敗したエジプトの魔術師のこと(出8¹⁴、15¹⁸、19)を述べたものである(成功の例、出7¹¹、12²⁸、37)。9節は、第六の災害のとき魔術師にもはれものが生じたこと(出9¹¹)を引用して、恐怖と神の報復を述べたものである。9節は、かれらが前に経験した動物による災害の恐れを、くらやみの中で思い出し、小さな動物にも驚き恐れたことを述べたものである。本節のへびに対する恐怖は出7¹²に関連があるのかもしれない(「へび」ではなく「かえる」のことだと解する者もいる)。

(6) 本句はある写本では、「悪は自分の証言によって、おく病者だと宣告される時」という意味になっている。「良心」という語が聖書中に出るのは、ここがはじめてである。著者は次の二節において、良心のかしやくからおこるおく病者の恐怖心を分析し、17¹⁸節にその例をあげている。14節の魂の「虚脱」参照。これは11節の「理性からくる助けを捨てること」をさしたものである。レビ26³⁶、37、ヨブ15²⁰、24、格28¹も参照。

(7) よみのくにで眠っているのと同じ状態、すなわち動かず、死んだようになってること。本書では、死後靈魂が閉じこめられるという「よみのくに」は、時々肉体の死を象徴したものとして出る(16¹³、14²¹参照)。しかし本節ではむしろ、罪に対する永遠の罰である「第二の死」(黙21⁸)をさしている。この意味において、よみのくには義人に対して無力である(14参照)。

(8) 17¹⁸節には、音の七つの例があげられ、おく病者の恐怖心の分析に用いられている。おく病者は、風のさ

あるいは目にも見えない早さで駆ける動物の足音、
あるいは最もすさまじい猛獣のうなりごえ、
あるいは山の深みから響きかえるこだま、
これらはかれらを恐れさせ、動けなくした。
全世界はかがやく光に照らされ、⁽⁹⁾

妨げられることなく、その働きを続けていた。

しかしかれらの上には重苦しい夜がひろがっていた。

これはかれらを包むやみのかたどりである。⁽¹⁰⁾

しかし、かれらにとつては、このやみよりもかれら自身のほうが重苦しかった。

18 1 しかしあなたの聖なる人々には、いと大いなる光があった。

かつてのかれらの苦しみがいかなるものであったにせよ、

かれらの敵はかれらの姿を見なかったが、その声を聞いて、かれらを幸いな者と

呼んだ。⁽¹⁾

また、いじめられても仕返しをしないかれらに感謝をし、

今までの仲たがいのゆるしを請うた。

3 あなたはかれらに燃える火の柱を、⁽²⁾

未知の旅の案内として、
また光栄ある旅路の快い太陽として備えた。

さやき(17節a)にも、へびの走る音と違っておびえ(9節b参照)、おおいかぶさるようしげった枝の中から聞こえる鳥のさえずりをも、「恐ろしい音」(4節c)と思う。17節には快い自然の音の例があげられ、18節には恐ろしい音の例があげられているが、おおく病者にとつては同じように感じる(18節d)。

(9) 出10²³には、イスラエル人の住む所には光があった、としかしるされていない。「全世界」という語は、著者が詩的に描写したものである。

(10) エジプトの重い夜のくらやみは、ふたたびここに、よみのくにのくらやみのかたどりとされている(注、参照)。

【注】(1) 本句は、他の写本では、「エジプト人はイスラエル人が苦しんでいないのを知って、イスラエル人を幸いな者と呼んだ」という意味になっている。ラテン語訳ではさらに異なり、「イスラエル人は、苦しみを受けていないので、神をほめたたえた」となっている。本訳が採った読み方では、本句の「かつて苦しんだ」と次句の「いじめられた」の動詞の時相が一致しており、両句間に意味の調和が見られる。「節bからc節aにわたる意味を述べてみよう。くらやみにいたエジプト人は、イスラエル人の姿を見なかったがその声を聞いて、イスラエル人がくらやみに悩んでいないこと、およびイスラエル人への圧迫に対する罰として自分たちがくらやみに悩まされていることを悟った(1節b)。エジプト人は、自分たちがなめているくらやみの恐ろしさがあまりにもひどいので、かつて自分たちがイスラエル人をひどく虐待したという事実を忘れ、くらやみの災いを受けていないイスラエル人を幸いな者と呼んだ(1節c)。そしてイスラエル人がこの機会を利用して、くらやみの中で身動きできない自分たちに仕返しをしないことを感謝した(2節a)。

(2) 出13²¹を参照。この参照箇所「火の柱」とともにしるされている「雲の柱」のことは、本書19⁷に引用されている(出14¹⁹、20²⁴、40³⁸参照)。本節における「火の柱」は、イスラエル人にとって、焼けつくような熱を放たない快い「太陽」のように描かれている。

4 あの人たちは光を奪われ、やみに閉じ込められるに値した。
それは律法の不滅の光⁽³⁾を世に伝えるべきあなたの子らを、
とりこにしたからであった。

Ⅵ 死の天使はエジプト人を滅ぼし、

イスラエル人をゆるす

5 かれらは聖なる人々の乳のみ子をみな殺しにしようとした。

——その時ひとりの捨て子が救われたのだが——

あなたはその罰として、かれらから多くの子を取り去り、
またかれらをひとかたまりにして、荒波の中に滅ぼした。

6 あの夜⁽⁴⁾のことは、われわれの父祖に前から知らされていた。⁽⁵⁾

これは、かれらがたよとする誓約を確信して、

勇気をもつためであった。

7 義人の救いと敵の滅び、

これをおあなたの民は待っていた。

8 あなたは同じものをを用いて敵を罰し、

10

これにこだまするのは、敵の乱れた叫び声であり、
子のために嘆く悲しみの声は遠くまで響いた。⁽⁶⁾

9

われわれをおあなたのもとに召し、われわれに光栄を与えてくださった。
正しい人たちの聖なる子らは、ひそかにいけにえをささげ、
聖なる者らは恵みも危険もひとしく

わかち合わなければならぬという神のさだめを、

心を合わせて実行した。

そのときすでに、かれらは父祖の賛美を歌っていた。⁽⁶⁾

(3) 著者の考えは、イスラエル人が享受した実際の「光」から、「律法の光」へ移る(「律法」とは、ここでは、旧約聖書に啓示されている広い意味での「生き方」をさす)。エジプトの「くらやみ」からよみのくにの永遠の「くらやみ」に移った17²⁰の場合と同じ。

(4) モーセのこと。神の摂理によって、「ひとりの子」が水に捨てられたために救われ、エジプト人は「ひとかたまり」になって紅海の水におぼれた。

(5) エジプト人の長男や動物のういごが殺され、イスラエル人がエジプト人とのきずなを絶って自由になった夜のこと(出12²⁹⁻³¹参照)。このことはイスラエル人によく知られていたもので、ここに「あの夜」として語られているのである。この「夜」のことについて「父祖」になされた「誓約(次句)とは、アブラハム、イサク、ヤコブになされた約束のこと(創15¹⁻¹⁴、16¹⁻¹⁷、22¹⁻¹⁷、31¹⁻⁴)」。

(6) 本節は過越の祭りの描写である。この夜に、「いけにえ」は各家で「ひそかに」ささげられた(出12⁴⁶参照)。これは神の命令によるもので、イスラエル人全体が選民として行なった最初の宗教行為である(出12⁴⁷)。

11 奴隸も主人も同じ罰をもって罰せられ、
庶民も王も同じことで苦しんだ。

12 すべての家にはひとしく、

同じ死をとげた数知れない死者があった。

生者は死者を葬ることができなかった。

一瞬にかれらの最もとおとい世継ぎが滅ぼされたから。

13 自分たちの魔法のゆえに、何ごとも信じなかったかれらは、

長男の死を見て、この民を神の子だと認めた。⁽⁷⁾

14 やすらかな静けさがすべてのものをおおい、

夜がすみやかな足どりでなかばまで進んだとき、

15 あなたの全能のことが玉座を離れて天から下り、

取り消しえないあなたの命令をするどい剣のように手にして、

いかめしいつわもののように、滅びの地のただ中に降り立った。

16 かれは立ったまま、すべてを死でおおい、

天にとどきながら地を踏まえていた。⁽⁸⁾

17 そのとき突然おそろしい夢の中で、幻がかれらをおびやかし、

18 思いがけない恐れがかれらを襲った。

半死半生となってここかしこに倒れた者らは、

自分たちが死にゆく理由を人々におしえた。

19 かれらがひどく苦しんでいる理由を知らないうちに滅びることのないように、

その者らをおののかせた夢が、これを予告していたからである。

20 しかし死の試練は義人にも触れ、

荒れ野では多くの人々が滅びた。

しかしあなたの怒りは長くは続かなかった。⁽¹⁰⁾

(7) 10-15節もやはり出エジプト記を典拠とするものである。特に10-12節と出11:1-12:29-30とは類似している(民34参照)。13節については、出7:15-22と8:3参照。13節の「神の子」については、出4:22と参照。

(8) 神の「ことば」を「いかめしいつわもの」のように描いている15-16節(12:16-17参照)の細部は、「破壊の天使」のことを述べている歴上21:15-16の描写法をまねたものらしい。そして本書のこの箇所は、聖ヨハネが黙示録11:14で「神のことば」をつわもののように描くとき、かれの心にとめられたものと思われる。教会は、14:13節から死や戦争に関する表現を取り除いて美しい詩とし、これをキリストが静かな夜にベツレヘムで降誕したことをたてる典礼文としている(キリスト降誕後の主日のミサ入祭文)。

(9) 死の天使に撃たれて死にひんしているエジプト人の長男のこと。

(10) 著者は、前記のエジプト人の長男の死と対照させて、20-25節においては、一四、七〇〇人のイスラエル人を荒れ野で殺した疫病(民17:1-16:46)に言及している。疫病は22節では「懲らしめる者」、25節では「滅ぼす者」と呼ばれている(一コリント10:10参照)。神の怒りはイスラエル人に対しては中途でおさまったが、エジプト人に対

21 とがのないひとりの人⁽¹¹⁾が、人々に代わって闘士となり、
祈りとあがないの香を、

聖職のたてとして取り、

あなたのしもべであることを示し、

あなたの怒りに立ち向かい、その難を防いだからである。

22 かれがこの災いに打ち勝ったのは、

肉体の力や武器の力によったのではない。

かれは父祖に与えられた誓いと契約を思い出しながら、

ただことばによって、懲らしめる者をおさえたのである。

23 死者が折り重なって倒れ、山をなしたとき、

かれはその間に立って、怒りをさえぎり、

それが生者に及ばないように道を断ち切った。

24 かかるとまでおよぶかれの長い服には、全世界があった。

四列の宝石には、父祖の光栄が刻まれ、

かしらにいただいた冠には、あなたのみいつがあった⁽¹²⁾。

25 あの滅ぼす者は、これらのものを恐れて退いた。

21

とがのないひとりの人⁽¹¹⁾が、人々に代わって闘士となり、

祈りとあがないの香を、

聖職のたてとして取り、

あなたのしもべであることを示し、

あなたの怒りに立ち向かい、その難を防いだからである。

22 かれがこの災いに打ち勝ったのは、

肉体の力や武器の力によったのではない。

かれは父祖に与えられた誓いと契約を思い出しながら、

ただことばによって、懲らしめる者をおさえたのである。

23 死者が折り重なって倒れ、山をなしたとき、

かれはその間に立って、怒りをさえぎり、

それが生者に及ばないように道を断ち切った。

24 かかるとまでおよぶかれの長い服には、全世界があった。

四列の宝石には、父祖の光栄が刻まれ、

かしらにいただいた冠には、あなたのみいつがあった⁽¹²⁾。

25 あの滅ぼす者は、これらのものを恐れて退いた。

かれらは、ただ怒りに触れるだけでじゅうぶんであった。

VII 紅海はイスラエル人を通し、

エジプト人をのむ

19 1 しかし、容赦のない怒りは、悪人らを最後まで襲った⁽¹⁾。

しては「最後まで」(19-1)続いたことが、描かれている。

(11) アロンのこと。イスラエルの会衆は理由なくモーセとアロンにつぶやいた。モーセは、大司祭としてのアロンに香炉をもたせ、疫病に襲われているかれらの所へ送り、その罪のあがないをさせた。すると、疫病はやんだ(民17^{11,12}(16^{46,47})。23節は民17¹³(16⁴⁸)とよく符合している。

(12) 本節は、大司祭アロンの祭服に関するもの。「かかとにまでおよぶ長い服」という語は、出28⁴の「衣」というヘブライ語のギリシア語訳である。出28^{31,32}にはその造り方が詳述されている。この服は、ユダヤ伝承では、世界の象徴といわれている。「四列の宝石」とは、胸当の上に四列に三個ずつはめられた十二の宝石のこと、おのおのにイスラエルの十二族の名が彫刻してある(出28¹⁵⁻²¹)。24節については、出28³⁶も参照。「あなたのみいつ」とは、ミトラの前のほうにひもで結びつけられた金の薄板のことで、それには「ヤーウエに聖なる者」という文字が刻まれていた。大司祭はヤーウエに属するので聖なる者である、という意味であろう。

【注】(1) 著者は12章ではおもに、神の寛容について語っている(特に10²⁰節参照)が、ここではむしろ、罪を悔い改めない者を徹底的に罰する神の正義について述べている。神はエジプト人が悔い改めないことを知っている(で(次句参照)、かれらにふさわしい罰が必然的なものとして神から下る。このことは、神がエジプト人に強制的にそうさせたように描かれている(4節)。出エジプト記にもこれに類似した表現が見られる。すなわち、神が直接ファラオの心をかたくなにして、イスラエル人のあとを追わせたことである(出14¹、なお9¹²10²⁰27¹¹10参照)。

2 神は、かれらがのちに何をするかを、あらかじめ知っておられたからである。
かれらが民の立ち去るのを承知して、

これをせきたて、

3 あとで残念に思い、そのあとを追ってゆくことを、神は知っておられた。⁽²⁾
かれらはとむらいの最中、

死者の墓前で嘆きながら、

「⁽³⁾ またも愚かなことをたくらんで、

さきにしたのんで出てゆかせた者らを、逃亡者のように追いかけた。

ふさわしい宿命がかれらに強制的にこのことを行なわせ、

4 かれらに起こったことを忘れさせたのである。

それは、残った罰の苦しみをかれらに余すところなくなめさせるためであり、

5 またあなたの民にふしぎな旅を味わわせ、

さきの者らに異常な死をとげさせるためであった。

6 被造物全体は新たにされ、性質が変わった。

あなたの命令にしたがい、

あなたの子らを無事に守るためである。⁽⁴⁾

7 宿营地の上を雲がおおい、

水のあった所にかわいた地があらわれ、

紅海には障害物のない道ができ、

荒波に代わって草原があらわれた。

8 そこを、民全体は、あなたの手に守られて、

驚くべき不思議を見ながら通って行った。

9 主よ、かれらは救い主であるあなたをほめたたえながら、

牧場の馬のように走りまわり、

小羊のようにとびはねた。⁽⁵⁾

(2) 出12³³14⁵。参照。

(3) イスラエル人は荒野でさまざまだろうという14³のファラオの考えをさしたものでらしい。ファラオは、かれらに追いついてたやすく打ち破ることができ、と思ったのであろう。

(4) エジプト人の紅海における「異常な死」と対照させて、著者は、イスラエル人の「ふしぎな旅」(5節)のはじまりである紅海通過を7節に述べている。しかしその前に本節において、選民のための新創造という総括的論題をかかげている。これは、7節だけでなく、10¹¹節や18²²節にまで発展している。7節の「雲がおおい」という表現は、創1²の「神の霊は水の上をおおい」を思い出させ、また7節の「水のあった所にかわいた地があらわれ」(7節も参照)は、創1⁹を思い出させる。

(5) 本節は、イスラエル人が出15章の勝利の賛歌をうたって踊ったことをさしたものである(特に出15²⁰、な

結 び

(一) 被造物はイスラエル人に仕える

10 かれらは異国にいた時の出来事をなおおぼえていた。

あ のとき、生き物ではなく、土地がぶよを生み出し、

11 水の生き物ではなく、川がおびただしいかえるを吐き出した。

また、のちにかれらは鳥の珍しい出生も見た。

それは、かれらが欲にかられて珍味な食べ物をこうた時であった。

12 かれらを満足させるために、海からうずらが飛んできたのである。

(二) エジプト人はソドム人と同じように罰される

13 罰は罪びとの上に下った。

しかし雷鳴による予告のしるしかなかったわけではない。

かれらは悪業に応じてふさわしく苦しんだ。

14 かれらは客人をいっそうはげしい憎しみをもって扱ったから。
 15 もう一つの民は、見知らぬ旅人が来たとき、これを受けいれなかったただだが、
 16 そればかりではない。どんな罰がかれらにふりかかるであろう。
 あの人々はいやいやながら異国の人を迎えたが、
 16 かれらは祝いをして迎え、

お詩114〔113〕³⁻⁶参照。

(6) 著者は、節で第七の比較を終わっているが、ゆるやかな推移をもって、ここのところから、結びにはいつている。この結びは次の三つに分けることができる。(一) 新創造についての簡単な再考察(10-12節、なお16-14、出7²⁸⁻⁸、8³⁻⁶、8¹²⁻¹³、17¹⁶⁻¹⁸、民11³¹⁻³²参照)。10節は、前の部分に述べられた紅海における新創造に先んずるもの、11-12節はそれ以後のものである。(二) 神は悪を罰するという基本原理の再考察(13-14節)。エジプト人は、ソドム人が目をくらまされたように、同じような罰をうける。しかし客人冷遇の点では、ソドム人より罪が重い。(三) 被造物の中に見られるふしぎな調和の描写(18-22節)。神は、音楽の大家が同じ音を使っているいろいろな律を出すように、選民のために元素の互いの関係を変えただけでふしぎを行なう。

(7) 出エジプト記にはしるされていないが、普通、雷(17)とその注4参照)にはとどろきがつきものである(詩77〔76〕¹⁸⁻¹⁹参照)。

(8) 「もう一つの民」はソドム人のこと。14節は創19²による。「かれら」すなわちエジプト人が、自分たちをききんから救ってくれたヨセフの父や兄弟を歓迎したことは、創45¹⁶⁻²⁰に見られる。16節の「祝い」は、ヨセフが兄弟たちにもてなしたこと(創43¹⁶⁻²⁵、31-34)をさしたものでらしい。「同じ権利」は、ヤコブの子らがゴセンに定住したこと(創45^{18,20}、47⁵⁻¹¹⁻¹²)をさしたものであろう。

自分たちと同じ権利をもつ者に、
ひどい労働を課して、苦しめた。
かれらは、濃いやみにつつまれて、

自分の家にはいる戸口を捜したとき、
あの人々が義人の戸口の前でそうなったように、
目をくらまされた。

(三) 改められた宇宙の調和

18 元素が互いの関係を変えるのは、
たて琴の絃が調べを変えるのに似ている。
しかし一つ一つの音色は常に同じである。

これは今まで起こったことを見て、おしはかられる。

19 陸の生きものは水の生きものに変えられ、

水に泳ぐものは地の上に移ってきた。

20 火は水の中にあっても、自分の力を保ち、

水は火を消す力を忘れた。

21 これに反して、炎は死にやすい生き物がその中を歩いて、

その肉を焼くこともなく、

霜のように溶けやすい天からの食べ物を溶かすこともしなかった。

22 主よ、あなたは、すべてにおいてあなたの民を高め、かれらに光栄を与え、

かれらを見捨てず、いつでもどこでもかれらのかたわらに立っておられた。

(9) ロトの家の戸口(創19¹¹)。かれは10⁶で「義人」と呼ばれている。
(10) 19節は、おそらくイスラエル人が家畜を連れて紅海を渡ったことをさしたものである。19節は、かえるの事をさしたものである。(10節、出8²)。18節は、16²⁴—25の原理を詩的に反復したものであり、20²¹節は、16¹⁷—19²²—23を反復したものである。

(11) 著者は本書を賛歌で終わっている。この賛歌は、先祖と同じようにエジプトで苦しんでいる同胞ユダヤ人をはげますものである。旧約聖書の中で最後に書かれた本書のこの賛歌に似た表現が、新約の第一福音書であるマタイ書の終わりに見られる。すなわち、「わたしは常にあなたがたとともにいる」というキリストのことは、やがて迫害にあう教会をはげますものである。